

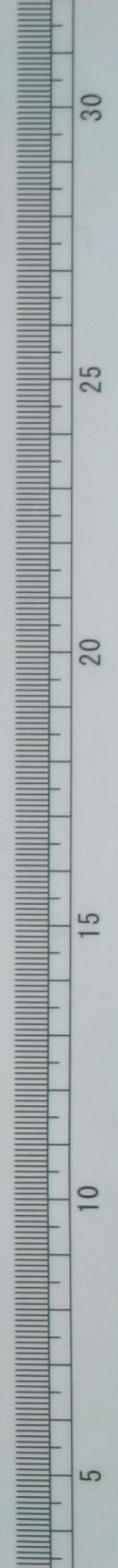


甲戌瑣錄

三

昭和九年三月下旬起筆

特別
14
1919
458



甲戌瑣錄

昭和九年三月下旬起筆

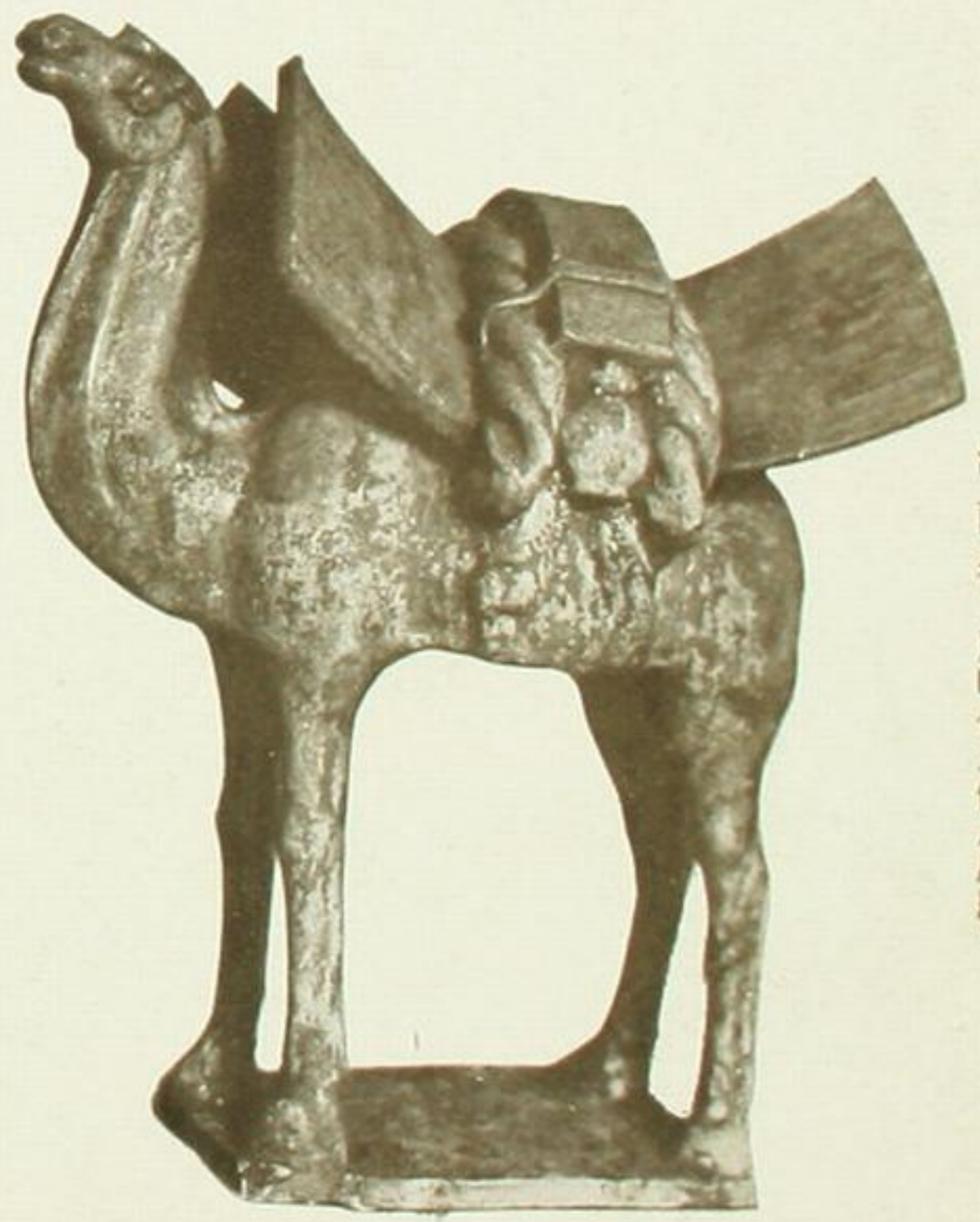
○此等物。在中野武蔵侯の原を龍岡校行
 没頭し。あり。此夜七杉香頼壽伯の召集あり。中野齋
 如のよ十数人。西月莊。今一。此。高田如。藤。如。助。永
 井。折。大。中。御。誠。之。由。を。も。見。へ。て。人。を。何。ぶ。種。の
 族。か。活。き。傷。の。材。料。と。う。も。の。七。多。少。あ。つ。た。侯。の。執
 事。の。意。田。友。家。が。杖。あり。あ。る。が。中。野。殿。侯。君。高。年
 を。往。て。指。さ。る。物。材。料。蒐。集。の。困。難。を。以。て。感。ず。る。不。か
 六。原。形。を。後。人。に。見。せ。て。冗。漫。に。笑。し。た。不。也。眼。目。を
 喚。し。と。あ。る。不。七。少。さ。く。さ。い。自。分。の。筆。者。に。重。複。の
 儘。出。を。頼。心。理。す。べ。し。と。説。き。二。三。揮。話。の。自。分。の。切。り



唐時代 大武人士偶 一對



白磁 香爐



河南省 唐時代土偶(駱駝)



河南省 響堂山 石佛寺 石首

酒を興味として其の人の信曲と云ふ
一語あるべしと説き、中野を田満一途の人とするの
死を時し、其成の爲め紛争を消停する其の意は、
古武士の如き硬骨漢は、義の爲め、或武士も居す
る然るに、然るも重人にして信義を喪失し、其の事
を以て見んとして尤も其のありや、其の取引所を善導し
たること、活版屋業に好む所も示し、其の中野の人格
の如何の如きことを説き、依末の如何の評論を附
す、其の事を見よ。

○別に、余は、祥瑞の研究を二日と考へて、後心ひえ
れ、えん石刻松大寺あり、心血を凝らし、結果ひえ
し、其の間諺の人と云ふて、其の祥瑞の真体を現し



一と云ふ事もある。全体、これを祥瑞と云ふ、永正十年、即ち
足利時代、佛柱悟と大の、入つて、居士五郎太夫
が祥瑞であるとして、その事、其の事、其の事、其の事、
家七、これを祥瑞と云ふ、其の事、其の事、其の事、其の事、
夫と祥瑞、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、
日系の人、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、
一と云ふ事もある。其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、
即ち、百年の時代、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、
縁故の人、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

心の人を撥る切ると公平の解を得ることのあること、石
刻が百年時代を切り下け徳川氏初期に於て伊勢の人伊
孫五郎大夫を祥瑞としたの事、いろいろの歌からヒント
を得て居るやうであるが、實に伊勢松阪に於ける最勝寺
の伊孫の家裏代は是れあるけれども、過る帳の四祿の
災に罹り、祥瑞を徴すべきに本記録さるるにけん、
一基の墓の礎石を祥瑞りと推測さるべきことある、
その日記を以てしてその段年を述べて居ると、
すうのいれを根柢を以て置き行くの記録に就て
油盡すまでも、徳川初期の人とするに於て、記録と出
ふことか、さうである。こんまい一概に是利時代の人と極
め、こゝに桂林漫録の記さるるの文拘泥してゐるから、他



の記録は皆爾即せん、附合に附合を重復してゐる。楊
とあり、於ては武市に南が落合と洵磁塔を著して
んるに、龍けりるる祥瑞の事、此を挙げると、
後、朝鮮の由を孝宗平加磁社のあると改め
て世に表し、
とあり、世に此の記し、私するやうに、併し、
平を磁社としかる、石刻の終惑も一層深め、
朝鮮系の由を、今利の、
ふから、
祖とすることを得る。そこか、
蓮華院の記録や、
三年、
三年、

三年元和二年の物類一報書に達定して深付を燒いた
ことゝもかゝるすまゝにすつた。當時彼さん以東徳法に
入るゝ容れもさうことゝもさうなるに、お申大夫の身と也
支那人の油子に愛慕も入り、えんじことゝもかゝる縁さゝる
祥瑞を支那人心とする様も自然、こんど所かゝ起る者
理心ある、統向石割の研究と、莫如読めると、左の教
にゆき有るものゝある

一 祥瑞の陶磁の象。さふお、永正十年、三傳梓桂
と大内かゝる物類一報書に、長士お申大夫と、いひ、
人名ある

二 永正の伊藤五郎と、さゝるの、一門の出身び、約百年
の時、代と、傳りて、出れば祥瑞伊藤お申大夫と、いひ、



三 此人が日本、景徳鎮の磁法を始りて傳りて、磁
祖のあり

四 此の朝鮮の李承平、物類一家の油子
書に、誤り傳りて、えんじ徳儒、也、さゝる

五 隆つて日本の磁法、朝鮮系統の自然、
二、橋つて、いひ、さゝる、景徳鎮系統の磁法が、
法と、いひ、統向、傳りて、えんじ支那系統の、
太の、いひ、瑞の年、傳りて、左の、如く、さゝる

△ 天正五年祥瑞お申大夫、伊藤大、打、住、
(伊藤の名、倫人、物類、板、頭、注、記)

△ 文禄三年四月(十八日)海、(日、上、及、蓮、草)

院記帳

△元和二年(四十一年)清和二十三年(一〇七〇)劇院
記帳

△寛文三年(五月)十八日(十七日)坂本(最勝)
寺の養神と大日村怪子神社の神事株入
入帳(連名)後)

○此年人氣のあつた興行の新芝居出来比日本劇場(目下
開演中)の第四のマーカス、レミーのゴンスレウエー、
銀次坊附しをあらと群衆の劇場の時分を待た
けて群あつておる。此劇場は大方白聖館が完成
可なり年一を往比よりはやいまど入つてこれこそが

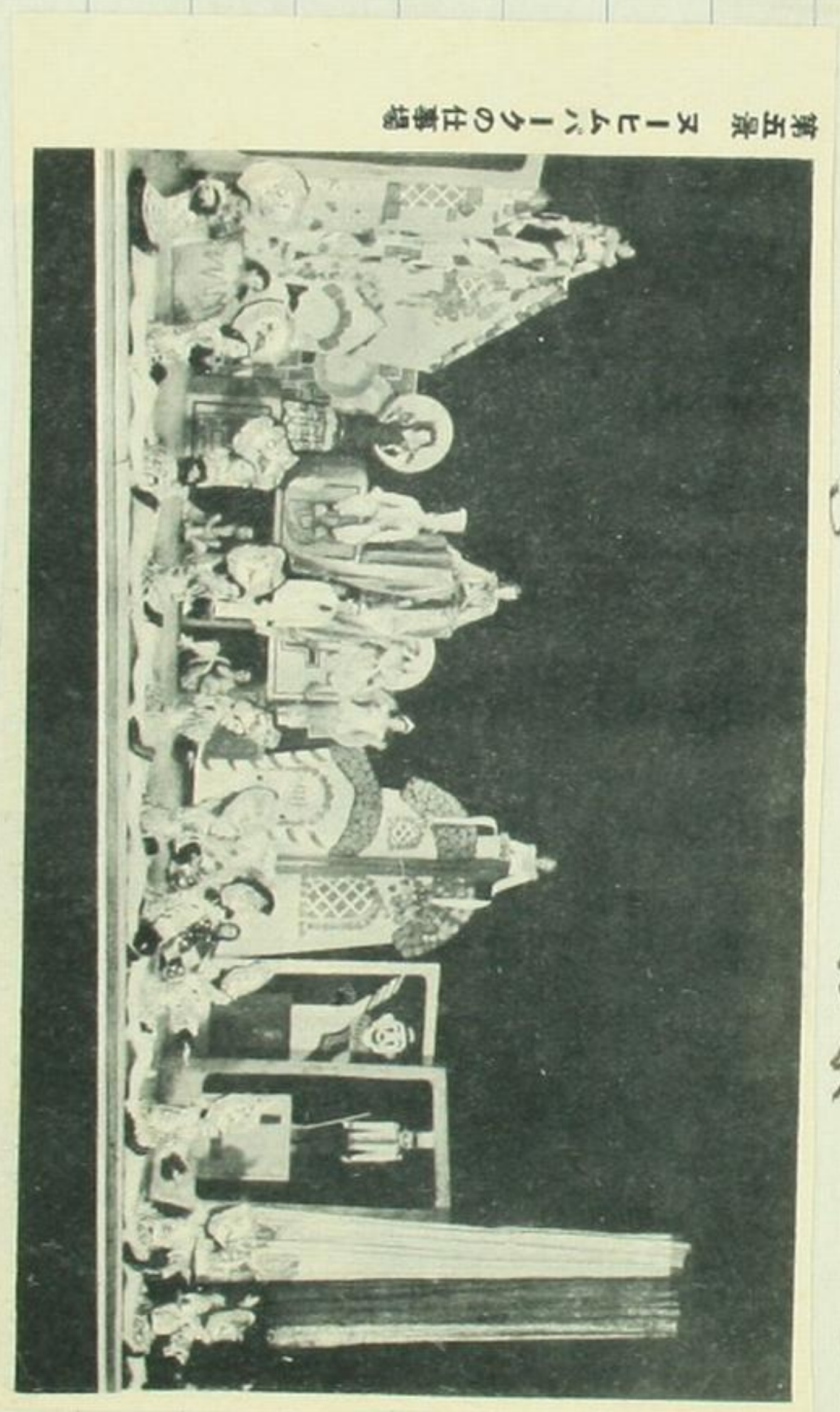


西洋ダンスの興味を持つてゐる人々も、暇と
暇と出さうけり又此いゝとまた大まな劇場ひある。
今分のレボエー固いなるやあの中、ゆきと感せんルダ
ンスらブロードウェイ、メリゴランドで二時三十分
まで全部を演じよう二時間を要すが、舞臺の光
景とダンスの服装を二十八回くりかへして演じ、目まぐる
しい程変化があつて、どの客も四五分間のダンスが出る
のだから、其の賑はる大まなもので、舞臺の装束も服装
小柄の表立を演じ、日本人の目に怪しむるゴロニ大
リと思ふべき風もあるが、スピードが急が死から走馬燈
のこころ向ふ演ずるから、二時三十分の間も退演
せしむる恍惚の間(さ)もわく家、ぬがある。未廿四日

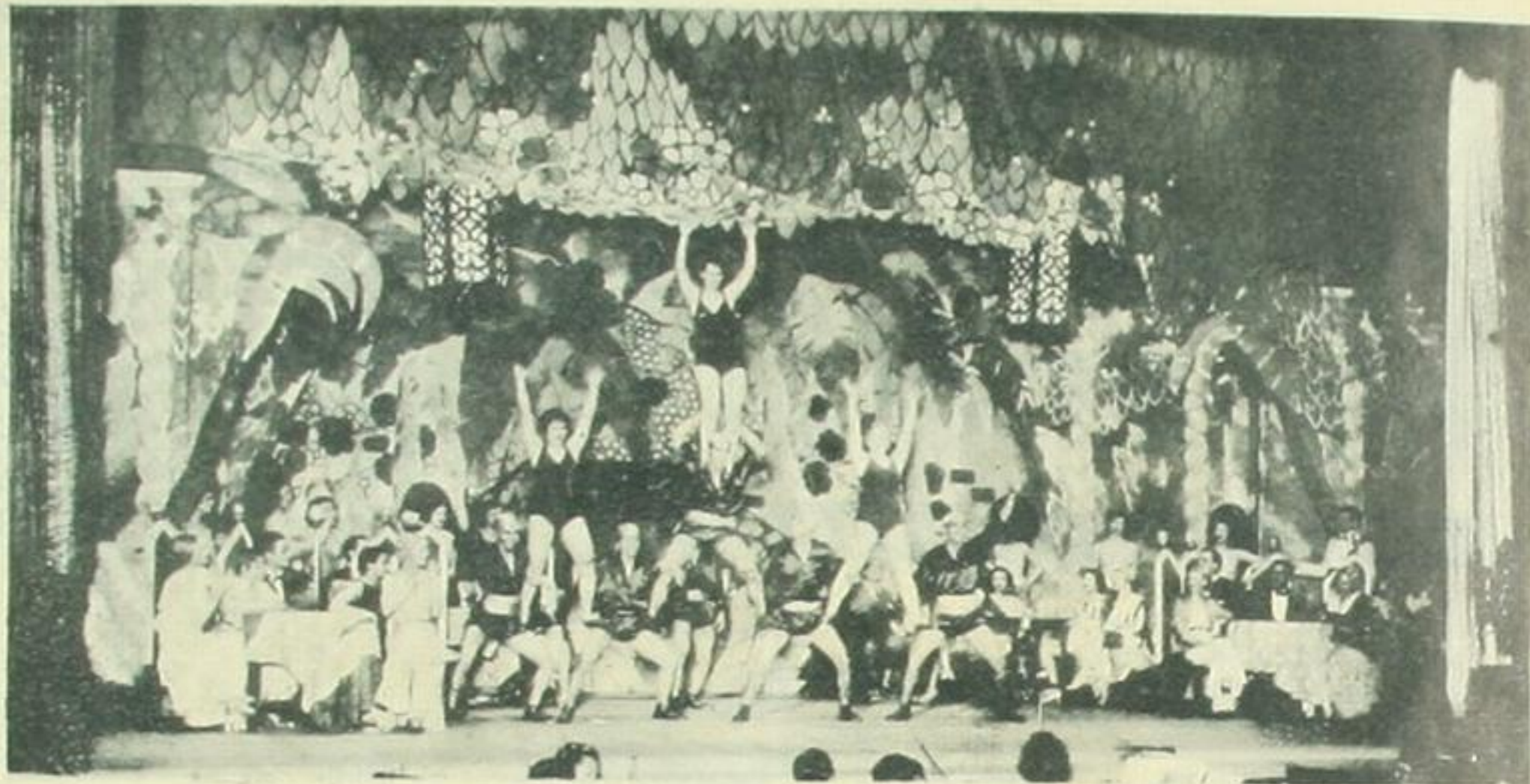
金の聖者と云ふもの、全身の金を七の如きと云捲く、金の
 光北月の如きものを、頭後：飾り死から天の如く擬し、比
 較せしむる思ひの、ガロテスリ、あるが、外人の故味
 る投すると云ふ、才五景の仕事、情を云く、しれ、高き面
 る、の、固の、こと、も、あ、日本、の、當、る、お、像、さん、の、禮、の
 甚、重、か、此、上、の、異、物、を、其、ま、か、函、の、納、ま、り、て、お、ふ、タ、ン、サ、イ
 り、順、次、に、踊、つ、て、活、氣、が、漲、る、若、い、ダ、ン、サ、イ、を、多、く、の
 情、而、脚、の、金、部、を、云、く、り、し、お、い、全、体、一、絲、も、解、け、る、全、程
 であるのを、日本、の、流、す、地、け、に、折、衷、さん、に、さ、へ、て、お、る、
 ガ、ン、ス、を、例、の、う、う、流、す、油、が、あ、る、が、多、数、但、を、さ、す、も、踊、る、か、ら
 や、流、す、油、を、破、つ、か、ん、も、え、く、**◎**男子の消納、ガ、ン、ス、が、か、ん、の、か
 ら、と、こ、う、流、す、油、が、補、い、ら、る、日本、に、け、ん、又、其、ま、地、け、ん、さ、く



ら、音、頭、が、か、く、こ、も、て、日、米、あ、ま、の、女、性、が、打、混、し、を、踊、る
 情、而、も、あ、る、日本、の、女、性、が、特、に、日本、の、股、持、を、踊、る、意、を、
 米、の、女、と、**◎**コン、ト、ラ、ト、**◎**が、あ、つ、て、お、も、し、ら、い、兎、角、此、の、大
 し、ロ、ユ、ー、と、名、を、し、た、舞、臺、を、お、の、ま、し、切、釋、を、よ、め、れ



第五景 マーヒムンクの仕事場



平尾郁次氏（時事新報、三月一六日朝刊所載）
 新作の構成演出は前作と同様レオン・ミラーで相變らず素晴らしい演出効果を挙げ、今回の構成は前作のバレスクショオから離れ可成りレヴェユ的な色彩を加へたものである。尙、作中に「さくら音頭」を配したり「軍艦マーチ」のメロディを聴かせたり日本の観客層に向くやうに各景、各出演の出し物をアレンジしてある。

中代富士男氏（報知新聞、三月十八日朝刊所載）
 （略）二十六景に挿入された流行歌「さくら音頭」など緩急のテムホで兩様の振りを見せたところなどレオン・ミラーの頭腦のさえた。ちよいとしたものだが、急造してこれだけにまとめる振付師は残念ながら寶塚にも松竹にもあない（中略）第二十一景のカリフォルニアの山で、急行列車を思はせる群舞、一轉して機關車のヘッド・ライトが見えて、かすかに獨唱が起るあたり、一種の詩情が浮び上る。

三宅英一氏（東京日日新聞、三月十八日朝刊所載）
 （略）これ程まとまつたレヴェユ團の來朝したことは、最初のことなのであるから、かなり大きなショックと收穫を日本人に與へたことは確である。先づ第一に從來の寶塚・松竹の少女歌劇などのいぼゆる『レヴェユ』がいかにつまらないものであるかといふことである。あの息もつかせない踊りからコミックへ、歌からアクロバティックにアダジオに、變化してゆく舞臺面は、たゞ踊りと歌の連続にしかすぎないわれわれの概念としてなへられてゐたものくらべて、どんなに面白いかもしれない（後略）



イケ・グンヤ・イエヴァーハ　ーナタ・ドンラーロ

マークス・シヨオを観て――

岩田豊雄氏（朝日新聞、三月五日朝刊所載）

一座のうち、これが中心人物といふ人はあないが、粒がそろひ、種類がそろひ、なかなか賑やかである。パレリナ・カールス、フアンム・ニユ、アクロバット、歌手狂言回し、喜劇役者等、一切の構成要素に缺くところはない。なかでも振付師兼踊手兼役者のレオン・ミラーの藝が出色で、あのステップなら、どこの大舞臺でも買ふだらう。

小野金次郎氏（讀賣新聞、三月四日刊所載）

日劇のマークス・シヨオは免にかく來朝レヴェユ團としては最初の大さきである（中略）絢爛なコスチューム・プレイたるよりは要領よくヴァラエテ式に、色々なものを狙ひひたすらにその見た目の變化を中心としてある。旅の興行として、かうしたアイデアは正しい。

足立忠氏（中外商業、三月四日刊所載）

（前略）實に二時間以上に亘るものを、文字通り「息もつかせず」そのエロテイシズムとラブソティのなかに観客を完全にまきこんでしまふのは大したものである。

小林勇氏（都新聞、三月五日朝刊所載）

（前略）おそろしくスピードアップである。殊に驚くのは、チョイとしたデコ／＼場面が正に一二分位で閉幕しては次へ／＼と移行行くそのテンポの早さ、これではなくてはいけない。

Broadway Merry-Go-Round

ACT I

NOVELTY OVERTURE
Mrs. Coudy.....Directing
Lee Mason.....Crooning
Hershey Surkin.....Drumming

INCIDENT No. 2. MEET THE FOLKS
Introduced by Matsui Leon Miller
Ben McAtee
Elmer Coudy
Ensemble

INCIDENT No. 3. TELL ME THE TIME PLEASE
Frank.....Danny Kaye
George.....Elmer Coudy
Lothario.....Dave Harvey
Peggy.....Dottie Coudy

INCIDENT No. 4. DANCE SPECIALTY
Margo Busch and Cathleene Young

INCIDENT No. 5. A Workshop in Neuremburg—TOYLAND
"Toyland" Sung by.....Lillian McCoy
Doll Dance.....Miller Dancers
Tap Drill.....June Marshall
Sylph of Dolland.....Jane Marshall
Jackanapes.....Dave Harvey
Hans and Creteil
.....Leon Miller and Georgene Miller
Suzanne, Suzette, Suzan
.....Helen Hudson, Margaret McAtee,
Helen Palmer.

INCIDENT No. 6. THE PEST
Danny Kaye, Margo Busch,
Dottie Coudy, Ben McAtee

INCIDENT No. 7. RHYTHM INTRICATE
Sung and danced by.....Hershey Surkin
Rhythm Dance.....Miller Girls

INCIDENT No. 8. MY HUSBAND
John Doe.....Elmer Coudy
Richard Roe.....Danny Kaye
Robert Coe.....Dave Harvey
The Wife.....Georgene Millar

INCIDENT No. 9. VOCAL INTERLUDE
Roland Tournier

INCIDENT No. 10. Palais de Femmes—GARDEN OF GIRLS
"Lovely Girlhood"
Sung by.....Lillian McCoy
Parade of Beauty
Georgene Millar, Ha Cha San,
Dottie Coudy, Dorothy San,
Margo Busch, Gathleene Young,

Waltz Pageant
Miller Dancers and Marcus Peaches
La Valse Charmant
Four Karels—Harvey Karels, Al McCaskill, Bill Cummings, Sylvia Sharp

INCIDENT No. 11. SPECIALTY
Ben McAtee

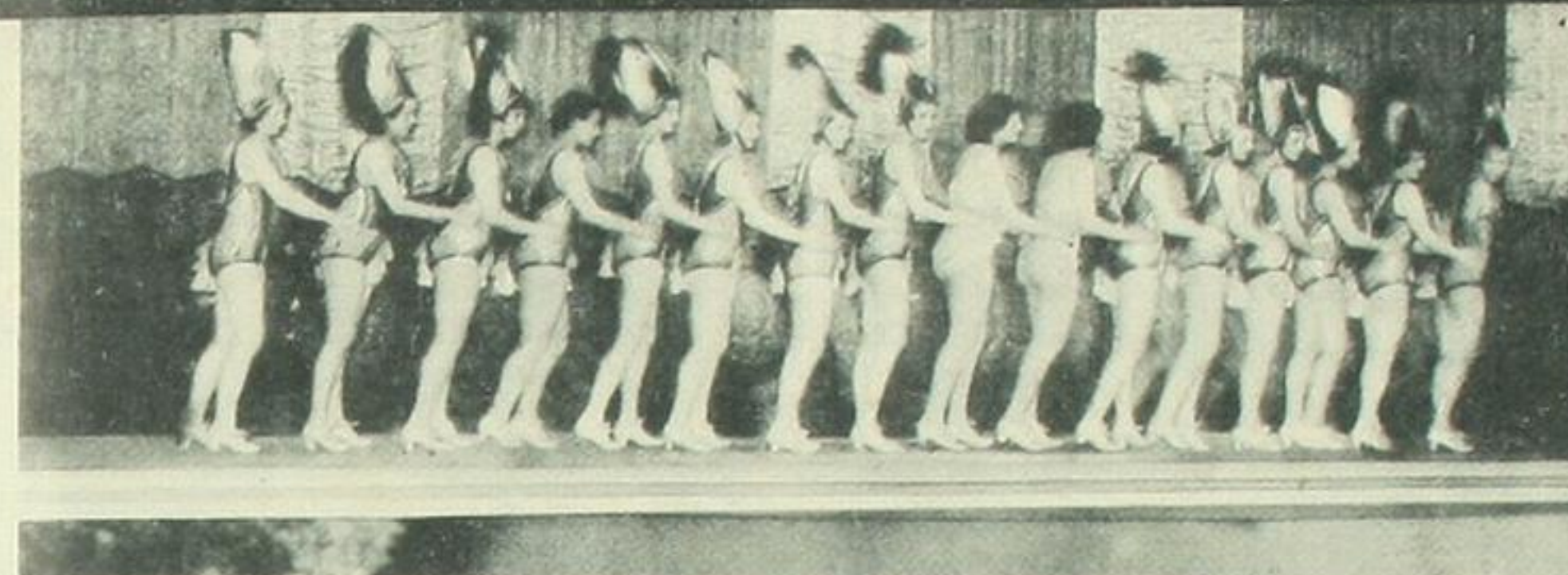
INCIDENT No. 12. Hall of Terpsichore—DANCE MANIA
Introduced by.....Leon Miller
Dance.....Miller Girls
Stair Dance
.....Leon Millar, Hershey Surkin,
Georgene Miller, Dottie Coudy

INCIDENT No. 13. MERRY MUSICAL MOKES
Dave Harvey, Danny Kaye, Lee
Mason, Elmer Coudy, Ben McAtee

INCIDENT No. 14. Pearl of the Antillies

EL MOCHE HABANA
"In a Cuban Garden"
Sung by.....Roland Tournier
Cuban Tango
.....Dave Harvey and Cathleene Young
Habana Rumba.....Miller Dancers
Rumba Travesty

.....Leon Miller, Georgene Millar
Joe Morgan.....Ben McAtee
The Singer.....Ginger Brown
Guests.....Margo Busch, Dave Harvey
Waiter.....Danny Kaye
Specialty.....Bounding Ali Babas, Behee
Ben Mohamed, Hassan Ben Mohamed,
Hamido T Ben Hamid, Ambarck Ben
Mohamed, Mohamed Ben Said, Laurence
Pete Rodriguez with Goldie
Kidd, Rita Brady and Ella Leteryer



第二十一景
アルホルニアの山

ACT II

INCIDENT No. 15. FLYING FEET
Divertissement by Ensemble

INCIDENT No. 16. ACCORDION SPECIALTY
Lee Sechrist

INCIDENT No. 17. In a Garden—THE SLEEPWALKER
Elmer Coudy, Danny Kaye, Dave
Harvey, Lee Sechrist, Margo Busch

INCIDENT No. 18. Milady's Bower—THE PEARL, THE SHAWL and THE FAN
Maid of Pearl.....Dottie Coudy
Girl of the Shawl.....Georgene Millar
Beauty and Her Fan.....La Fanette
The Platinum Three.....Lee Sechrist,
Cathleene Young, Lillian McCoy
Fan Tableau
.....Miller girls and Marcus Peaches
Sung by.....Lee Mason

INCIDENT No. 19. THE SAP
Dave Harvey, Danny Kaye,
Dottie Coudy, Ben McAtee

INCIDENT No. 20. THE CONTEST
Dance Specialty.....Leon Miller
Interpreted by.....Matsui
The Challenger.....Hershey Surkin

INCIDENT No. 21. Mountains of California—FLIGHT OF THE LARK
In this amazing stage effect A. B.
Marcus has reproduced with authentic
fidelity a pass in the coast Range of the
Golden State and the Guadalupe tunnel
from which bursts THE LARK, crack
limited of the Southern Pacific R. R.
Song by.....Lee Mason
Train Drill.....Miller Girls

INCIDENT No. 22. HURT ME
Elmer Coudy, Dottie Coudy

INCIDENT No. 23. THREE COBS
Dance Specialty
.....Harvey, Young & Kaye

INCIDENT No. 24. Temple of Gold—GOLDEN HOURS
"One Golden Hour" sung by
.....Lillian McCoy
Black and Gold Girls.....Miller Girls
Bouffant.....Marcus Peaches
Golden Girl.....Ha Cha San
Parade of Gold.....Marcus Peaches
Queen of Gold.....Cathleene Young

INCIDENT No. 25. On the Banks of the Nile—CLEO'S LOVERS
Cleopatra.....Dottie Coudy
Ali Baba.....Elmer Coudy
Marc Antony.....Danny Kaye
Julius Caesar.....Dave Harvey
Octavius.....Ernest Stone
Interpreted by.....Matsui

INCIDENT No. 26. ONLY THING I WANT
American Theme Song
.....Leon Miller, Ginger Brown
Soft Shoe Dance.....Miller Girls
Sakura Ondo.....Nichigeki Girls

INCIDENT No. 27. SPECIALTY
Ben McAtee, Georgene Millar

INCIDENT No. 28. "A Girls and A Boy" Sung by
Danny Kaye, Dottie Coudy, Lillian
McCoy, Lee Mason, Elmer Coudy
and Ben McAtee
Dance.....Miller Girls

FINALE.





PROGRAMME
Greater Marcus Show of 1934
Presenting The American Revue
Broadway Merry-Go-Round

- EXECUTIVE STAFF FOR MARCUS PRODUCTIONS, INC.
- A. B. Marcus..... General Manager
 - Charles Hugo..... Managing Director of Foreign Tour
 - Bea Winsome..... Stage Directress
 - Leon Miller..... Dance Director and Production Manager
 - Louis Rosen..... Master Couturiere
 - Mrs. Young..... Wardrobe Mistress
 - Mrs. Harvey..... Assistant Wardrobe Mistress
 - Ernest Stone..... Chief Technician
 - Josef Kearns..... Head Electrician
 - Jack Harvey..... Scenic Designer

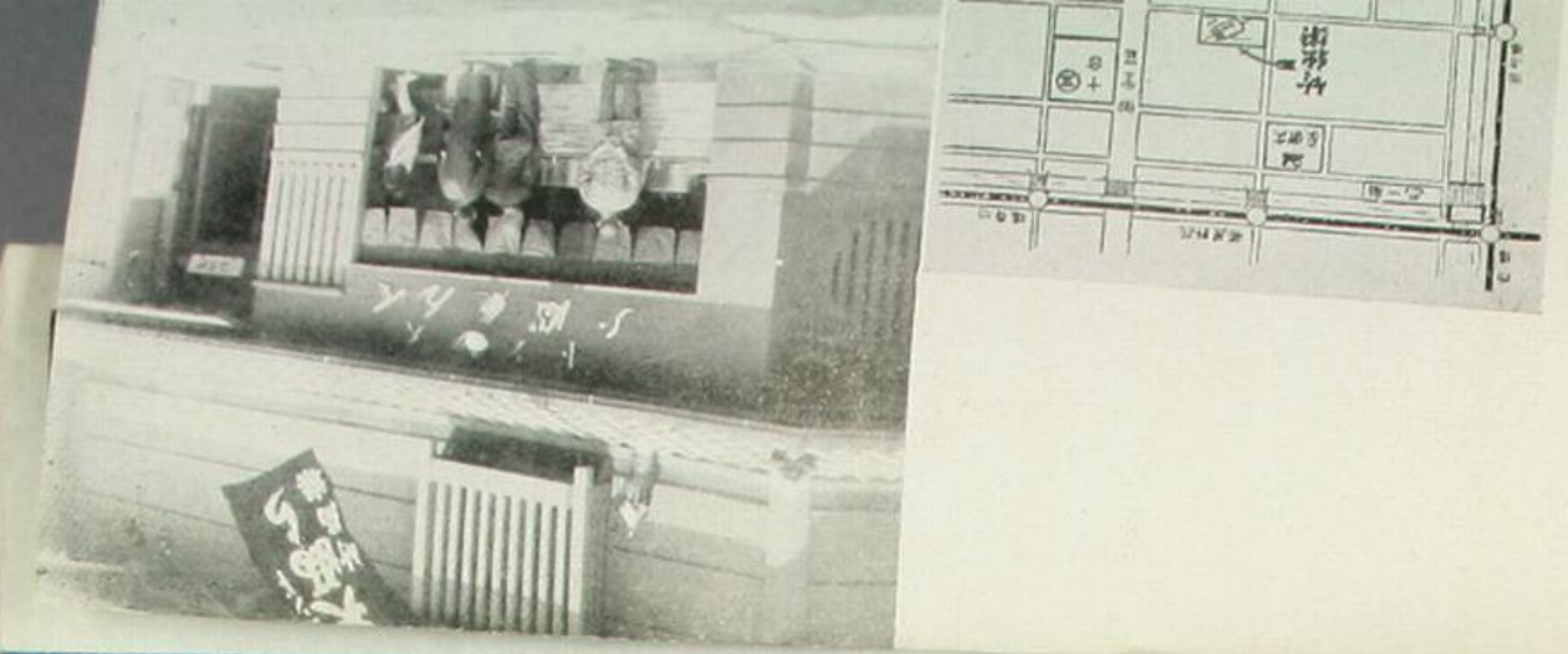
日山谷のハル騰の隆盛であつた時料理代の高いのを
 恐いれ送流のいろく傳つておふがこんまを飾り舞
 一多の一流を得た。何代目園十郎の石のむちあふ
 多合の代目があつたか、或る年の午無行の大
 ありをやつた千秋楽の慰答の言葉とハル騰の開
 いた。あ果て、高きとるると、園十郎の胸集
 り信歎七首のの、園十郎七歳と、意のあふ思ひを
 うら、美を拂ひつて、主人栗山、面會を求めた
 料理の仕用、料理の何か獲難い、よめもあると
 と、アへて見ると、主人の云ふ、さうさう、さうと云
 園十郎や、露骨に、さうさうと料理代、いかに
 高きと、主人の、さうと、正根を吐くと、主人の、さうと

從横、魚を定まらん、酒をぬす、少ゆゑの女大と
書畫と幅と方まき、若し割す、亭の壁上に掲げ
ハ鏡に向き、余まじりて寝る、掲げ、寝後の
酒を飲む時、不拍、換ふ、此は又三曲の方前を得、
皆は切形を冬色に揮画あり、一箇に雪山松雪の
中、帯と古物と画し、一箇に龍虎(雷)と画す、
こゝろに及、及、余生未、存手紙を好む、然るも多
獲、能く、畫す、珍重と持、うろろ、人々、風味と
飲つ、懶惰、故に織、名、如く、せ、る、もの多し、若し
余、又、画、景、あ、る、心、見、ん、あ、ま、り、揮、畫、手、前、を、信、
す、
○ 頼山陽の書簡を二巻、藝と余、題字と跋



と、
跋、一箇を其の女、
山陽の書簡、形式一箇の、
の、
の、
手、
七、
河、
あ、
あ、
云、
と

山陽の書簡、形式一箇の、
の、
の、
手、
七、
河、
あ、
あ、
云、
と



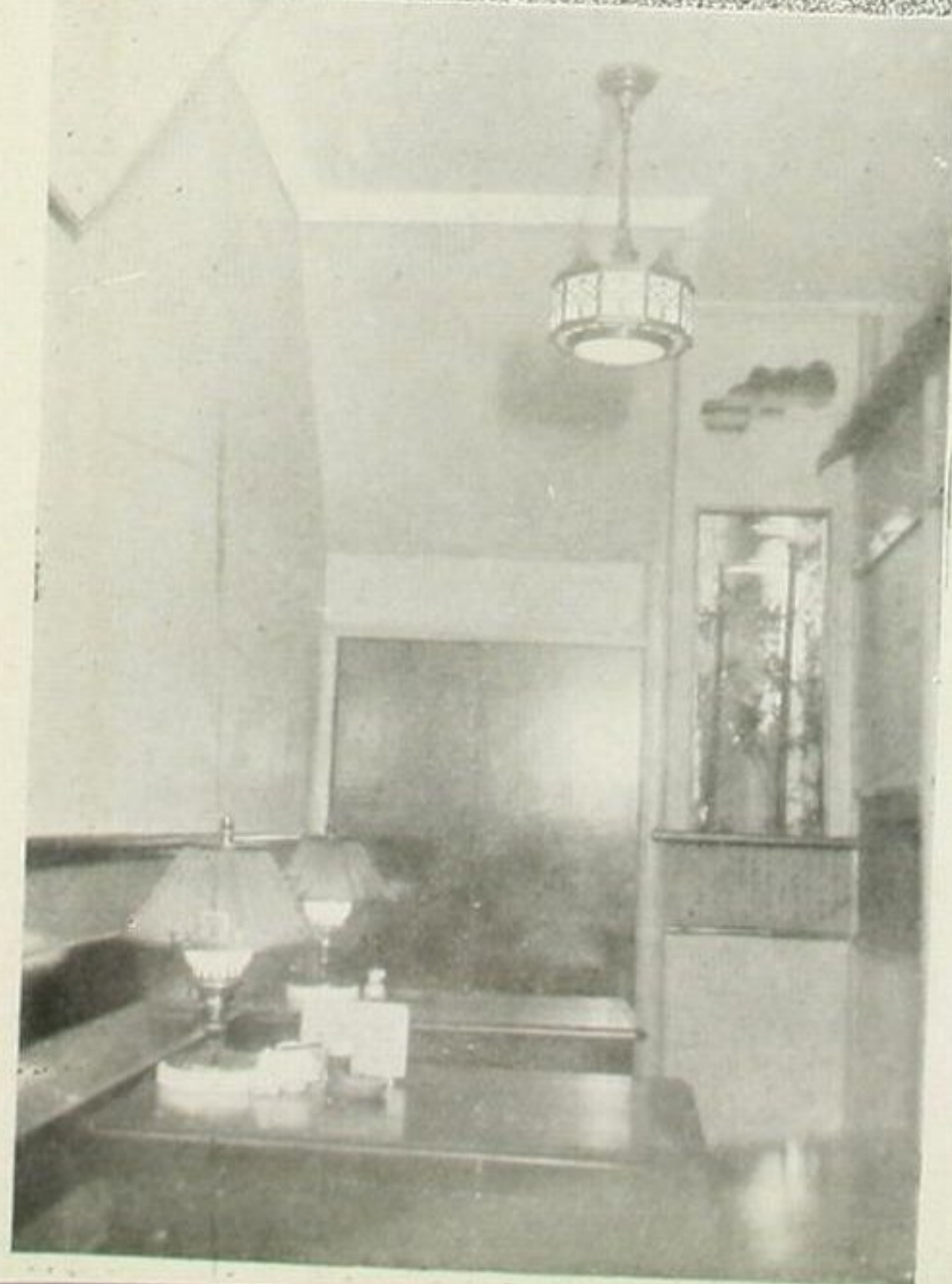
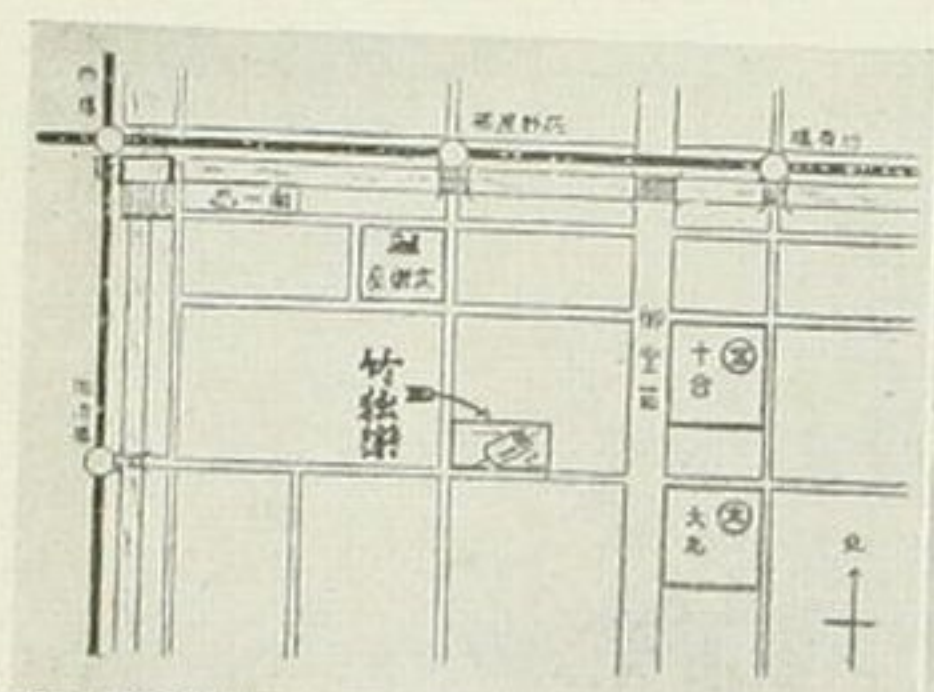
僧して名家の臨席とせしめ其法流の述にを載せし
 とか流行し、往々誰れも聴く念と云ふの七僧と云へり
 旅法公道の記あるが自合と云ひ来り、是の座を
 自合に出席して其の法を授けり。自合の飲む
 樂の方、自合の平の資格は多しと評し、此の記ある
 只初田出身であるが、引のふと云ふ出席し、
 今時の樂地の内、何れも此の流と云ふ割に
 自合の鳥の如き、海島料理と云ふ家、
 此の序に、未だ中、此に在り、其の昔、
 日野耕一、降法後、其の多し、
 遠慮を要し、其の人々の、自合の、
 出席、自合の序、
 一時、
 後、
 自合

自合

の流を聴く念と云ふ。

自合の江戸の文化は江戸料理と云ふ一種、上言や、
 洗練した料理の生れ、沿革と云く、
 七つ、
 江戸料理の論
 文化の移り、
 各地の大名の、
 未だ、
 折衷、
 江戸料理、
 花柳、
 豪華、
 江戸

大阪文樂座の一寸南に
 スタント天ぶらとして
 今度出来た竹獨樂です。
 値段も安く気分もよく
 殊に鱈のさゝあげなどは
 此家のみで味はよれる美味です。



大阪文樂座の一寸南に
 スタント天ぶらとして
 今度出来た竹獨樂です。
 値段も安く気分もよく
 殊に鱈のさゝあげなどは
 此家のみで味はよれる美味です。

大阪文樂座の一寸南に
 スタント天ぶらとして
 今度出来た竹獨樂です。
 値段も安く気分もよく
 殊に鱈のさゝあげなどは
 此家のみで味はよれる美味です。

時自合二人の出さうけと一人夫の酒を出さぬとさうから養老
を呼ぶ二人とさうが酒を出さかとうあともさるふ出さ
とさうから呼んじとさうある一人が酔倒れんと仕末困
ふから起のれ親之と思ひんじ。又ある時二三の家族をの
れ出さけけ時満ちて席がまるとさうあてあえんじ折角
味と方から来たれんじうくとさうと主人の在るやおれんじ
さけんかともふかく後踏んじとさうも奥よりんじ本に行
と客定りも取つてさうの部屋があらうと、度も附属
し主派さともふあつた。自合が圖書刊行令をやつて
おれりち毎年十二月、幸田露伴をお供する
の妙例であつたが、さう以後漸やく悪いれ。一つ言ひ
渡さるれりの當をねさ山人を呼ぶれんじとさうあるさう

此のまゝの通り悪いさうの時あつた。念通の山人胡麻合
の野菜物を丁寧な分析を初めて材料と一々千帳
二書きつたれが七八種の材料を考へてある。魚取着
の自合も成るさう、感んじることがあつた。八百膳の料理
とさう料理の献立を集めれば本はさうも流布してあつた
確うら江戸料理を集大成し、これ割と界の後本
さう此の通り悪いさうだ。

此の二客予三洲のさう、先生初めと出さるんじ此
東京の各物は何と一考うまかつたれむかとも予云く書
生の口びあつたから後は批評も出来さうのか大福餅か
ちもうまかつた。天麩羅と牛肉こんもぬ物であつた
何ともあつたあつた。此の物があいのむ、一つ橋を松目とさ

この時を想い流べし。何月かあるは、丁方其時が
鶏の焼の時物び、又の庄則と云ふのが、俵に二日位しか
まいと云ふす。野山にふい時を来ると、自投の鶏
を差上ることか出来ると云ふと、思ふは、出せんと
刺身のお品びも切つたに、思ふに、先づかある味
も考ふのよとの事、つて他不む、容も口も出来ると
思ふは、自今、淡備、自今、出の淡備とい、其つと塩
田の蓋も自然の味がついて、このれから、何んとも云ひ
い、好味のよむ、山葵、特、油、ひ、な、あ、人、も、あ、る、が、生、が、と
煮つて、つけも、ら、あ、ら、な、い、今、又、忘、れ、難、い、よ、も、と
此、淡、備、は、あ、る、と、自、人、も、思、憶、淡、を、や、つ、た。
淡備の流ら、自、れ、連、想、し、と、起、る、よ、も、の、納、屋、者、大、い、あ

る、自、今、の、ち、年、自、時、代、の、目、村、上、が、雞、信、を、使、く、以、振、
れ、と、思、場、の、納、屋、と、這、入、り、馳、走、を、受、け、た、こ、と、か、あ、る、納
屋、の、河、を、こ、渡、け、ん、た、甘、菜、茸、の、バ、ラ、ツ、ク、の、約、三、四、十
人、の、湯、を、た、り、得、る、よ、も、あ、ら、な、い、火、煙、も、あ、ら、な、い、大、石
の、鍋、が、掛、け、を、あ、ら、な、い、ま、ん、こ、一、俵、を、い、塩、が、入、る、の、塩、二、寸
位、を、ブ、ツ、ク、と、切、ら、ん、た、雞、肉、が、無、難、入、ら、な、い、の、を、思
ふ、初、め、の、塩、の、大、量、の、多、い、の、を、思、ふ、年、の、の、が、あ、ら、な
い、こ、と、思、ふ、て、あ、ら、な、い、が、あ、ら、な、い、沸、き、ら、な、い、の、を、思、ふ、雞、肉、が、あ、ら、な
い、職、ハ、盛、ん、か、い、ま、ん、が、塩、氣、を、摩、り、を、受、つ、け、ま、い、の、を、思
ふ、割、合、い、の、量、の、味、味、と、投、し、と、取、上、げ、を、肉、片、を、食、つ、た
思、ふ、の、塩、の、味、ハ、ま、ん、と、さ、ら、な、い、寧、ろ、味、味、味、か、い、く、ら、な、い、あ
り、塩、氣、も、勿、論、あ、ら、な、い、か、あ、ら、な、い、特、油、を、取、り、い、と、思、ふ、あ、ら、な

味があるが何人も云い得るうまいものか、こんと納豆を
うめてあるか、こんと大量の肉の脂肪を心づく一種のメシか
ら生ずるよむ、恐らく此メシはハチ腰と云ふ必り得る
よむあるらうと思ふべし。

自今か先創始は、外も亭の刺身を注ぐに所
幸なちつてビーロ一本を製した。清元の刺身はけハ生きた
のころけしハ冷やんる。新鮮であるのみならず、数心二紅の
今サと菜の花が一輪添えてあるに、いづく菜を入つた。菜
花のららるるをいづく見ると、添えてあるの、料理者
の心づかひをいづくと思ふ。野菜をいづくを歌する
と色の配合もいづくをいづくの料理をいづくのいづく
大切に働きてある、西京の刺身店に、此等の如き木

木

羽板の中は、肉を挿し、焼いた料理を出した所がある。こ
この木香を肉に移す趣向が、なるほど細く、又、深
切の味がある。西京の料理の習性、物々深切で、雨倒
と云ふと、湯豆腐のやうな、茶味をいづく
エビと海山に附けて、可なり古の味だが、
日本橋横山町の、ある店の、酒焼、名のある、尾法を
家、いろいろ料理をやつたが、ある時、三夏の、日傘と行つた時
ナマエの干末を出して、庖丁の味をいづく、感
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

らに評がある。日本の並敷の母界の何ぞもその鮮美の味を
得ずるは飽きを感ずる生りまゝ食ふの味である。生の方がうまい
からの事は支那の燕京を始め都々々油と遠くともあるの
で鮮魚を得難い関係から、何かかた飽き大するの味もある。乾物が
材料にあるから随つて料理の千数か、この交る不便さ
西洋の何れも同様であるが、自然料理法も進ませるを得
るが、何かの何れも脂肪づくめは徹底的煮火とすることか
米と其の料理があるか、材料を因つて或は刺身や粉の
ことと生まを可し、或は生を即ち湯がくの可とするもの
がある。これを口とちふ料理が出来るとあるまゝは、漬物
の料理がよいか、漬物の料理がよいか、まゝの国民性も因
ることだが、バターや脂肪がどうなる料理も、遠入りのが最上

料理

の料理と言ひたいと思ふ。支那の純粋の精進料理は、
まゝも出来てゐる。野山菜もあるが、夫れは植物性の脂肪がふ
らん、又用ひるとあることか、何れも感服出来ぬ。保し料理
ののち、精進料理も、野山菜の人の難くともある
である。流石に支那の精進料理も、何を得てをると云ふのが
公平である。まゝ料理の極段、いんまふと云ふと
恐らく材料の何れもを揃へ得るの味、まゝ其形も其味も
まゝ、多種の材料を料理し、因つて混融するのを極段と
するべきである。形をどういふ鳥獸の皮と、肉の味つて見
と、其の野菜と分り、何れも何れも和がある。まゝ其形も其味も
まゝ、やうなものは、極段に遠く料理と言ひ難いと思ひ
るが、西洋料理も、何れも其味も、支那料理と決

讀書頁



春城翁の隨筆 小精廬雜筆

相馬 御風

市島春城翁の「小精廬雜筆」と「櫻内進道翁數則」「紅葉山人を題された隨筆集を某氏から送つてもらった。「師の弁」「條約改正の斷末」「一つ橋時代の大學同窓會」「天子世阿彌」「良寛禪師」「廿年の無人島生活」「酒」「葛飾北舞」

岐なること、全くこの人ならではのと敬服させられる。
私は早稲田大學との關係上、又翁とその郷國を同じくしてある關係上、これまでに翁の高風にあはしたことは幾たびであつたかわからぬほどである。しかし不幸にしてしまじみ翁と對面してお話を伺つたことは數度を出ない。しかもその度に翁の明らかな、豊富な、縦横自在な、そして時に青年輩をすらも顔色なからしめるほどの純情と熱意との續ることのあるあの座談に魅せ

られないことはなかつた。そして「これほど座談においてすぐれた人は現代幾人あるだらうか。」といつも思ふのであつた。
春城翁の隨筆は私の心に感銘するところであるが、それがいつも翁その人に接してお話を伺つてゐると少しも變りのない親しさを感じさせるところ、やはり翁その人が同時に現されてゐるからであらう。翁の隨筆は材料の豊富な點において、方面の多岐なる點においてたしかに當代隨筆界第一であると思つてゐる。唯ちるゝところは斷片的であるが、その背景として廣い文化的考察と豊かな知識とが嚴然として控へてゐることを疑はない。
すぐれた博識家の雜談は單に知識のばらまきであつても、讀者を益するところ大なるものがあるが、春城翁の隨筆はその上に更に翁其人の洗練された樂天的人生觀が力強く總てに浸潤してゐる。私は高い意味での苦勞人の一典型を翁において見る。

ともすれば陰うつになり勝ちな翁後のやうな地主に生れながら翁はいみじき明るさを以て生活全體を統一してゐる。いかなる場合でも春城翁の顔を出すところ、文句なしに朗らかな空氣がかもされた。しかもそれは苦勞をしぬいた結果から來てゐる。地獄のかまの底をぶちぬいたやうな廣やかさである。この點は分難はちがふが、どこかにやはり越後が生んだ良寛和尚などと相通する一點があると思ふ。
春城翁の隨筆を讀んで興へられる時は殊に私のやうな即興思想家の者には貴い良藥である。それが今度の「小精廬雜筆」において一層ありがたく感じられた。これまでもかなり多くの翁の隨筆集が出版されてゐるが、今度の氣に添へられた版がうんと澤山あるだけに、一層多く親しめるからであらう。近來の佚著の一つとして廣く推薦するにちがひない。所以である。四六判、四八五頁、貳圓八十錢、下谷金杉上町八〇ブツクドム社

酒のぬるよむ大坂の飲め大抵の酒は皆よむ飲ぶ氣
かすむ好くよむ自分七北の感坊に永い万支配さん却
つて都門に酒を肴に王侯の酒のあることも知らざる
つね。

明治八年頃自分の考生時代の物お打場の大坂忘
れてゐるが舊友と今うたお探討の結果大坂
たのぬくもあつた

米ハ一石六圓 下宿屋が三圓 半銘五錢
ロースハ其 軍鶏屋が四圓 湯飯二錢
お香五圓 寄の木元錢二圓五錢
へうくの茶坊が四圓 田村八十錢
月お三十五圓乃ち一圓

標原製

○系系宗家完と人の信ししゆを信州者時々合し
此天交運と温めしこと年々有る故年今又とあり
すべきやと主人の中世に自今々継志分と呼ぶこと
いしと系系継志とある宗家の園名も、前代の
系系主人の志を継ぐべしとあり命じ此園未
だ、由系歴代の宗家又名を体し教と志し
今の宗家。市島歴といふも有るの子系に資を
世つて是も成すべしあり友を優遇し文運
を温めし、皆此宗の遺訓に導ふも、継志こと
をいふべしと衆皆可とるも、此の定款と此の
一紙を言とと治ん、由系著す所也左

昭和九年四月廿日



本會は市島家を中心として縁故者、組織に合
てある。市島家の意定しと越後系原にあり成辰
の際兵變に罹つたが、氣後其の所址に越後府水原
縣の政廳が置かれ、越後系原も近世の一史蹟の如
く、今の所址に於て、（同知の所址にあり） 郷人の遺蹟の更とありてあり、
此所址に継志園の名あり、（詳し） 某年の饑饉に際
し、窮民を救ふる為め、當時の市島家の城切を起
して田畝を拓いた、（城切） 排除の土が積んじ自然丘陵状を
有するなり、（市島家） 此の第宅を築んじ元と開拓の
結果生じた宅地が豪華の為め、築いたよりある。此の
由系も子孫に傳く、且つ奉公の志を継ぐありある為め
園に継志の名がある。此の再系市島家の式代受つ

亦面ハ龍臺と云ふを終りしと云を同徳の前世とし
牙二面ハ於七始の頂上と云得多し人即ち後紀より
考へハ大概龍臺と云ふ脚を轉して由途に就くを例
とし、是れと二、里人と云ふ多し引く糸、道の危険ハ
言語に傳ふ、政奉之を字す、と右に詳し、し、後紀
中往く予の行を挽く、あるまのあり、亦品拙を後
記の評に云く

前記所載に音然人猶有後之者、至於後紀所載從
前所未少載之文字前後皆考政天意、而後紀
之文更為之、是可知其為後者之境也
各 深に回るち谷并海屋の字す不るを右に引く
り、又旭花の題詩あり皆海まぐし、拙者の序に云く

後紀

伊和之界一溪貫之其傍多し其跡月漱在也下流
以拙者久歎於世其上流有者曰深溪其屬在法那
境甚幽邃尤為奇絕而傳邦人不之識、余嘗
題月漱書曰深溪山深夢今題此書曰深溪山出夢
曰一溪山也而一清一幽、只餘五回、歷於棧梨橋袖
曰美而不曰味、境名細細暗之、則冬如女美矣
此萬延に元序了、意可也萬延に余が生涯の年、し、
今、し、七十五年の、し、属也、余往年月漱の梅溪を採り、
口ことある也、其地形此の深布の下流なるを知らざる也
然し夫人若母の叙景の文、時時を免ゆらんも、殊に布敷溪
布の文をまて七ふ

或布之深、從龍臺而溢注、將觀之、不得不攀

雲化左肩而陰甚矣。峻崖峭斷無徑可躋。但見樹根
露出自崖延腋紛亂攢成。若衆小龍從而後解。且
松數十步。欣舍之。此無由得登。豈造物者靳其奇
勝不欲使人觀之歟。於是奮衣極進。歎反而上。手行
足送。恰如上梯。後者捫前者可躡。至上頭崖曲處。無
復可捫者。僅提巖角。以足顛蹙。下則雲化深澗。澗
水響于脚底。毛髮皆竦。既登。右轉而下。為數十武。
又有石壑。尤徑人耳。但以巨巖突出潭涯。僅寬一
翅。而未得見其全貌。若欲正而之。非越下流而就左
崖不可。蓋知造物者秘斯奇蹟。使人不徒技之嘆。
登猶行。伸者欲稱其偉。龕未全啓。帳未全褰。
而眼穿雲洞也。下流如渠。幅六七尺。寒而涉。乃見

勝。既濟。石崖徑而立。有若屏若柱者。摩又下山崖。直
及潭涯。則一茶葉亦從崖頂垂下。若十尺。其水之
往也。物振狀。酷肖曬布之一表。一表。翻及不止。其
為勢也。如霞降。如潮上。以風掠。察松而而留。其升
不動。不廠。水。曳。○布。不。底。水。少。善。曳。布。貴。其。軟
舒。不。動。取。其。喬。液。時。元。秋。六。徧。余。尤。見。曳。布
之。可。貴。也。其。潭。卷。起。全。石。如。大。壁。之。蓄。水。廣。亦。倍
於。不。動。滑。然。不。測。上。石。主。楓。揮。大。似。雲。化。右。崖
蓋。龍。脈。相。通。也。左。崖。之。石。次。中。上。殺。首。踞。相。插。
類。榻。若。底。者。陳。列。數。十。亦。奇。抑。提。之。曳。布。像
平。在。回。所。游。觀。名。久。歎。矣。余。謂。此。其。名。高。身。地。之
宜。其。深。之。深。則。恐。不。及。也。孰。謂。顯。揚。者。必。疏。而。閉

唯方必方耶

後記路の踏を脱く後栗と禁し得ざるよりあり、或る登攀
を脱くものありとんせ文を為す能く、陰難の音も
を登り音もす、音も多し、鎖も人問へるるを許さ
るる也、唯此踏を冒して秘器を探り得るもの報酬の
名文を得るに在り歟、若ある伊勢の傳記、梁沙と譯す、
此亦土井整身、身其他名流の序跋也、又其末、觀
大日澤記し、いふ、いふ、毎日附道とある一語也

後記登攀の難きを脱く更にも有りとす、其のあり推夫の
人間の如くもさし、所、昔、終、あり、無き、如く、人道、ある
可、歎、道、僅、く、存、し、利、を、脚、を、支、え、ん、と、す、不、あ、る、或
ハ、旬、旬、と、曰、長、く、と、せん、と、膝、頓、と、衝、く、所、あり、或、山、崖

唯方必方耶

其身を容れ、其を指し、僅かに出さざる事あり、三木杖を
さし、其も、く、も、腐、朽、し、是、を、托、す、ん、杖、カ、山、人、ん、と、す
然、れ、も、之、ん、と、是、を、托、せ、ん、ハ、前、進、を、得、ず、其、杖、を、援、き
身、を、輕、め、り、口、辛、め、り、杖、を、脱、き、つ、ま、ひ、後、者、を、し
戦、栗、と、禁、し、得、ず、と、い、ふ、カ、の、あり、此、等、の、文、點、破、の
人、も、あ、り、と、ん、ハ、或、し、得、さ、る、所、ハ、此、を、其、景、の、存、す
る、所、陰、難、の、路、を、進、化、ハ、其、區、を、秘、し、人、が、た、た、り、と、す
と、い、ふ、際、も、一、定、の、道、ハ、陰、難、ハ、其、景、を、音、も、す、大
要、素、も、も、ふ、べ、し、脚、無、き、よ、利、ハ、能、く、脚、あり、と、云
葉、ま、き、と、い、ふ、事、ハ、難、シ、脚、と、葉、と、互、に、具、す、る、故、に
初、り、と、景、を、傳、へ、ん、事、を、得、ず、音、景、の、多、く、鎖、を、
ん、と、人、問、ハ、傳、へ、ん、事、ハ、宣、り、と、此、等、の、踏、を、冒、り、ん、天

流七十二溪皆安態を異とし所、此溪の特長あり
、全世中三溪を又記し而時の記の中にあり
今因記を又し更し神すとす、錫田改奉、伊勢
乃儒者も梁海と都す、吾尾に觀大日瀑布記
を附す、此の瀑布、七月五日の附記の條あり
廣瀬旭名五條題詩十二首併せし記す、

潭水の可觀、人影散波、魚側有盤陀石、而鑿行有者
水流漸急、散沫白物、若蓬乱撞、長春風吹、不
大物若振、神勢自雲中、峭壁如堵、三言先翻、急
細跡似垂、萬間宮、渾古松、一水百層、碎忽成、變白龍、
均各曳布、瀑去伊勝、振物、有平水、回宮、心掛山、瀑、

廣瀬

古木陰、合、迴、風、眼、心、勢、龍、代、元、莫、也、綠、潭、
山、源、争、發、惡、流、先、寒、行、到、途、窮、安、能、後、若、得、
氣、沾、衣、袂、迴、風、直、且、深、想、人、歸、已、老、風、移、在、
松、崖、洞、中、臥、女、下、一、潭、忍、智、神、現、本、松、巖、
上、漂、与、下、漂、流、名、散、復、集、分、派、蒙、蒙、肩、如、人、
諸、深、多、行、路、斯、境、獨、直、下、混、一、散、十、尋、亦、似、
巖、窟、噴、流、瀑、其、方、二、丈、殆、不、知、源、所、在、雲、木、蔚、
〇此年、江、左、回、に、於、て、新、家、田、年、譜、出、版、
ミ、ハ、カ、ク、小、室、在、流、其、於、冬、一、部、婚、以、
子、部、の、一、部、北、書、の、所、在、回、の、人、
が、文、祿、四年、弘化三年、

予讀を細大草紙に尋ねり置唐年代記二冊を基
として三扶成五が更々天文十七年と書紀し
ぬ流皇年土地人成り行ゆぬく引返し等上三三二
十五年間をも海の家日記も板草年述かして
しうろそまて年譜体へ備置るるん地方の出物と
しつゝ出毛のもの也此の年譜と據るる流皇年田所開
創の寛治三年以前と推定(神武紀元一七四九年)
とあり、卷首に叙ゆる寛治三年の狩園に地
名を註回の地名又よ、んも三十年前の原示三
年の狩園と皇田沖とありて未だ其田の名を
新嘉田桑城の判れせんと、種令二霸府時代の未
嘉願と、山家年譜と推定せんとありて、新嘉田氏

新嘉田氏

の後継米海王移家は新保氏十八代つぎ、文和三
年清の武入ち十二代つぎ、四流もむ、此年流八
十枚、新嘉田の年譜に功略経羅し、末に安政六年
の御村帳と附し、この亦御土記料、に便使あはる
也
○いかにとよめ魚、西京の食膳、いつも上品と昆
羅湖、多く産し、これを、関東、無き河魚、
の流、天皇、愛念、遊、いせん、と、鯉の字、ま、出、来、じ、お
、現在、東京、に、移、す、北、魚、を、用、ゆ、料、記、を、あ、る、も
、魚、の、皆、西、京、に、輸、送、し、来、る、も、あ、る、近、来、多、摩
川、に、野、鳥、放、卵、し、移、殖、を、試、み、す、と、い、ふ、が、其、後、の、諸
息、を、い、ら、せ、し、高、野、日、立、川、の、農、子、試、験、術、の、作、成

數十尾の鮫魚を烹て食ふ、珍味の佳果初めて獲る
ものとして、皆三四寸弱のころろと味切ると西京のころろ
も佳を先、ゆ、或は目もたの清湯に因るか、明次帝
の御膳に上げも得たり、遺憾なき、追々鮫魚を香
魚の外に一名物を加ふるを乞ふ、
四月十日。

○余詩文を漢文毎に巨句に撰む、概ね手帳に録するを例
とす、骨を念くとも、敢て吾等の天外にも到るべくも
皆去る海の中に在る、情景、而して吾人之人を著す、
狂者、心華、あんなも業、
帳と換す、
乃了砂を披き名珠を橋出し、約五十則を得たり、左の如し

春光紅似濕、秋樹紅似乾、
寒蟹躡枯葦、孤鷺立殘船。

瘦竹穿歌壁、垂瓜絡憶籬、
好山香世界、涼影月梅臺。

詩如酒味醇正好、交似梅花疎更佳、
龍驤陌上春無艸、兵鎧沙中夜有戈。

板橋霜滑少人跡、古澗月斜多雁聲、
江雲飛極浦、瓜葉走寒初。

然鳥啼無定樹、犬吠不知村、
樹深徹透日、刺古不少鐘。

安平孤路水新、江抱屋如浮、
野氣天疑壓、鐘聲山欲浮。

山店雲迎客，江村犬吠船。
清風拂明月，明月掛清風。
漁本多佳格，紙本有真趣。
清風明月屬何人？
野水平橋路，柴門老樹村。
梅花未放，長安香。
溪邊採葉夕陽僧。
橫冰妨馬吻，田雪及牛膺。
朝權不謀久，何事欣然開。
心逐雲帆，情隨烟笛。
疎籬曲徑，田家小。
最難忘，雲衣難言。

湖雲侵臥位，杉水涵茶牀。
一盤山子，砌翠能說。
人間路窄，酒杯寬。
古木無人送，深山何處鐘。
水國舟中市，山橋村抄行。
帆重腰愈飽，橈潤鳴更傳。
水底星全滅，雲生火半山。
藥杵敲香，搗成夢。蒼館新裏，裏裏孤煙。
孤煙燃定，焚寒杵，搗鄉愁。
竹風秋九夏，溪月書三三更。
溪聲雷聲，聲於夢，浪半空。
岸潤山沈水，天低浪入雲。

鐘聲遠引月江氣夕沈山

水不忘情去有都

水喧村碓急雲墜寺門低

掃淨空庭白雲借我簷前石

天寒水都黃夜久燭光孤

一枕邯鄲別有天

一沈明月屬性聲

水田秋入暮山寺夜鐘沈

樹深烟不散溪靜望忘飛

夕陽倦欲盡村對大於山

藥室丸不大棋妙子與多

活深煙寺入仄樹

鐘聲

空一鐘朝寺音 聞山許豈待玉の枝衣而後心兩耶研

山蔬野蕪筆頭出滿幅唯聽凡露香

上山提布も 湖口借錢難

深者大春風山去長

○今更之わささか眼を靈活のよのさへ造化の儘心

二こととさくんが眼七儘心中のよのさへ眼ハ視

ることと司の杖測地と云ハ甚に前案に如定人のさへ

尚多りよか多い。如何さま眼ハ視のことを司の色を井

し形を知り遠近を判つ皆眼の働きのある。眼の大ききこ

ハ僅う鳩の卵程のよのさへあるが字を杖さすも式傳信

精巧のもハ其の識別力ハ強くべきことである

ことハ、銀定家よも云ハハ刀剣をえると其の産地

を言ひ書けるのみならず、誰の心もあつことまふ言ひ書て、失
すゝことが多し。眼元紙紙母、遠くをこゝへと云ひんせめる
去のし眼の字と物を、視物を視するのみむらさ。喜怒
哀樂の物を、的由に映るす。概しては、人の心があつ
あつと眼を露いり、所は不可思議と感ずる。エマーソンの
言るに、いかに若し人あり、其口を於て然りし、いかに、
否とあり、其口を信て、眼を信すしとあること、口を
心と云ふこととを、執任と云ひ得るが、心は正しく眼と友
映し、真実とあらば、眼の心の寫真様と云ひ得るの
がある。俗に眼が物を言ふと云ふが、この形容語を、
真の物を言ふのいふ、勿論然らず、考を考するのいふ、眼の
その考する、痛切である。相思の男が互ひて、目を信

眼の

しと相濟つ、肉知のさう、支那詩人の此詞、消息
と語り、空疎眉語度、紗輕眼笑未と云ふて、
れの眼、
いと起、
す秋波、
る。眼か、
部分を、
字眼と、
後の句、
か龍と、
か、
くと此、

歌聲新續雜蛙吟、依約紅雲影、自佳、詩酒一
春、日杜牧、烟花三月、勝秦淮、外方、綠隨、安、鷺、鸞
並、好、夢、誰、家、缺、餘、情、驚、聽、鏘、然、桐、角、迎、音、無、端
扶、醉、墜、金、釵

綠樹陰、蝶路昏、偶、行、追、難、訪、芳、園、嬌、等、聲
老、猶、呼、客、紅、芍、花、開、不、掩、門、借、此、錦、床、待、可、安
就地茶、靈酒、佳、温、清、絲、脆、耳、常、飽、好、聽
秋、歌、過、五、村

又、值、香、風、水、面、吹、選、花、開、遍、雨、晴、時、開、妝、世、漫
翻、羅、綺、若、色、天、能、保、粉、脂、滿、塢、午、烟、人、影、亂
一、川、春、漲、櫻、桃、遲、生、烟、似、袴、無、情、緒、不、吊、梅
兒、伴、雪、兒

○子與き婦人か子、概し人形を弄し、之ん握りしあつて
錦繡の衣敷を以てし、之ん供する美腹を以てし、常
に府向の愛いして愛撫し、寝る時、以て入んて抱く
如斯く子を欲する女性の至情を我邦にも其例なき
にあらず、偶に清曼いもの、唐土名妓術を演じ、支
那のあり、顧眉と云ふ妓、龍共高き又居り、志きり
女子を承けんと欲し、百方物を出し、七出来たるを
終る伽羅の若木を以つて男子の小係を心らせ、其の
四肢七頭七皆動かやうに爪し、之ん錦繡の衣裳を
を纏ひて、指の乳母を偏せ、時、懐を測いて精進
乳を吞りて、時、裳をまくり、便溺の状を
弄し、宛かく活人、粧けり、ことごとく、以つて自から

思を遺す事、これの誰の力彼の力此人形を若旦那と呼ん
とあるが、如斯きも記載するは極め稀である。

○今村細田花を借し、陰舞舞脚、坊々、折柄、平山
巻の、富久利、物二三の書畫、幅を揃く、未だ、題
と、法、乃、ぬ、年、一、需、く、あ、き、謝、拍、く、一、に、進、登、道、山、の
山、方、画、冊、と、柿、衣、工、門、心、水、酒、と、貯、く、其、二、六、品、一、し、七
爰、ま、へ、し、道、山、の、画、冊、堂、一、寸、三、四、合、物、え、ま、ま、あ、き、等
首、袖、表、雪、谷、の、自、題、あ、り、其、末、一、自、跋、あ、り、の、次
十、六、年、一、七、十、六、年、の、時、心、の、所、也、絹、本、二、十、枚、畫
物、を、極、め、机、あ、ま、の、珠、と、一、臥、お、し、供、す、る、ま、是、る、水、滴
徑、寸、二、合、高、を、五、合、梅、花、の、繪、あ、り、一、ん、本、得、易、め、と、い
ふ、より、小、品、架、中、一、の、是、く、入、し

四月十三日記

藏書

○書畫、南、小、原、成、心、の、詩、物、を、齋、く、未、だ、取、り、あ
弘、の、題、後、あ、り、有、弘、成、心、の、子、一、七、年、命、湖、山、と、養、心、の、地
師、是、湖、山、家、の、意、花、を、う、し、詩、の、毒、屋、と、擬、く、し、
お、所、を、論、し、如、く、よ、り、題、後、云、く、自、跋、あ、り、曰、わ、る、
八、二、木、下、伊、豆、の、野、を、あ、ら、う、と、い、ふ、事、も、一、洋、文、力、士
未、陪、才、我、心、其、木、戸、碑、例、の、事、を、記、す、也、
其、北、人、家、能、地、款、拾、遺、十、月、の、園、の、時、節、乱、後、也、
の、世、三、三、一、の、板、蕨、一、例、也、

大板蕨、冬、子、城、心、生、
日

止、已、十、月、還、回、在、三、木、戸、三、位、伊、豆、五、位、杉、山、西
冷、二、子、合、之、小、出、山、内、及、洋、文、力、士、レ、キ、サ、ニ、ル、ル、也、
一、ん、ス、返、舟、松、芝、浦、常、月、真、帆、歌、逸、此、夜、
カ、士、鬼、面、山、赤、彦、馬、予、其、末、戸、三、位、遊、研、例、於

伊豆氏家

〇或曰人の家名が伊豆のあつた時、精進の倭名ハ何と
と云ふ人かあつたか自分ハ勿論あることか出来たこと
つた。偶々松平浦と云ふ人が陰名致公祭中であること
と思ひ判り或は此書に於て「たぬき」を取神にも見ると
巻末にあることを考へ見れば、此若者も久しい間此
倭名をたぬき得たことを遺体としてあるから自
分の知らせしむるに無恥なることなり。左ハ陰名致
の字文を収めるが、倭名の保豆とある
ニ及れ文極まり時男あ互ひに愉快思ふまじ
洩し出す所謂精進と云ふものも、たばちける
ぬきとあるは古名の侍とあるはいと口惜し

和名抄も茶室垂那の房内徑云、交換之時
精進流儀と云ふ有て、和名も載せたる上は、
他の古書にも見えず、近年來心もな
くあつた思ひに、此間神遺方
由來豆流美の由

目起里葉寸信、底平乃故衣無奈、
止蒙通萬自波留進、美天之天保
豆於深久奈賀之以大寸毛乃乃方とある
と見あつて、こゝろも、賜物を得たこと、
せしむる、この保豆と云ふものを、精進の古名
と云ふもの、故又病名も、保豆古波美
耶万比又保豆如味とある保豆も、精進の

豆の義保の例の火の意か、豆
の末に思ひ得やんば和名鉦鼻口の類に、
唾の考考切敷云唾口中津液也、名者豆液
田取とある豆と曰るるも、此より血も化
ゆる精気の津液らん保豆と云ふのべし
るけり、かくして去年東思ひ遊びしこ
七時の海も、ある意味し穴おけり
んは依の精液の保名保豆とあるらん、女の陰具
七保名薯豆とて古同じ、若者こんの就き何事
糸する所なき物とて女感あり或陰戸の精液
をまけ或出す所する、撥り精液、アテ、此の
あるか、七時の女新の言まの居用例も、ある

ず、陰に、
あり、
日古ある、
の考け、
よの解、
し古多記、
物に及、
ぬも家、
ある、
リ、
かさん、
多きも、

日古ある、
の考け、
よの解、
し古多記、
物に及、
ぬも家、
ある、
リ、
かさん、
多きも、

わ、自分の料理、大衆的、そのと来れ、回路的、種々の
魚類が主である。材料のことも、傾向もある。味噌
汁の運命も、遠く危うくするの、あること、種々の
に、おいて日本の海、北の米、四の支、肉、魚、がやうに、米
と、是れ日本料理が、喰ひたいと、まわりの、まぜると、金魚、就
の、肉と、全、成、排、れ、材料、を出して、又、此、が、教、う、い、れ、の、ま、
者、れ、の、汁、も、あ、ま、ま、う、ま、か、つ、ま、あ、つ、め、れ、三、粒、め、入、
て、喰、つ、れ、ま、う、味、増、け、の、些、の、胡椒、を、點、し、芥、
の、粉、末、を、溶、か、せ、れ、よ、い、ち、あ、つ、れ、と、ま、う、鶏、卵、の、茶、飲、
あ、い、し、七、氣、あ、ま、い、う、ど、の、甘、煮、れ、の、七、合、の、比、が、米、飯、
ハ、喰、ひ、た、い、ふ、れ、と、ま、う、柿、漬、の、漬、る、ま、味、増、け、ハ、一、粒、
の、ス、ー、プ、と、し、て、外、人、の、食、料、と、ま、う、い、ふ、と、運、命、か、う、の、い、

運命

も、ま、い、と、ま、い、れ、が、あ、ま、ま、白、味、増、け、の、調、理、の、仕、方、
は、外、人、の、食、料、の、ま、う、と、ま、う、思、い、い、れ、外、人、の、食、料、と、ま、
候、の、香、氣、の、あ、ま、ま、胡椒、を、除、く、こ、と、か、出、来、の、と、
候、の、ま、ま、と、ま、ま、大、衆、的、の、ま、ま、と、ま、ま、の、ま、ま、と、
候、の、ま、ま、と、ま、ま、今、ハ、ト、ン、カ、の、か、ひ、ど、く、
流、の、ま、ま、外、國、産、の、魚、類、七、合、の、ま、ま、い、か、ら、大、衆、
の、食、料、の、材、料、に、な、つ、た、ま、ま、い、か、ら、要、の、ま、ま、と、ま、ま、
料、理、の、ま、ま、あ、ま、ま、料、理、の、ま、ま、と、ま、ま、お、あ、ま、ま、と、ま、ま、
も、得、つ、て、あ、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、の、ま、ま、い、か、ら、と、ま、ま、
の、あ、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、の、油、揚、を、う、す、と、断、つ、て、和、ま、ま、
か、い、汁、の、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、が、し、七、粒、の、ま、ま、と、ま、ま、
い、ま、ま、か、ら、あ、ま、ま、と、ま、ま、の、ま、ま、と、ま、ま、の、ま、ま、と、ま、ま、
い、ま、ま、か、ら、あ、ま、ま、と、ま、ま、の、ま、ま、と、ま、ま、の、ま、ま、と、ま、ま、

○平凡社も發行する書藝といふ雑誌に書道に關する
一文を讀みしときと頼まんが編輯の場を鳩して一冊成
つた直に揚載の上金命を切りぬき北冊子に收めし
が大要の書藝に其人の性格を捉すものなり大抵其の書
を覽ると筆者がいんまにありかゝる想像がつく或る流
の書をおつた人かどのか個性が現れん何人も自分の
書むやうやくよくかくことか否か困難であるさあ若
しこの流の傳統の書風の人が多く書風を定むると
時代の人であるかおもしろいものなり利唐時代の風
を免かんといふと説き更なる書藝の藝術であること
を説き画も書も其の概を一にする論は先生の支那
の文字の象形であるから論じらるると説き殊に象形

を例に挙げても文字の振舞ひ書法をどうするかと
いふ更なる書藝と書く場合はたゞ字の大小長短が
錯綜しておのづから調和がとれ同じ字の重ぬる
ハ別枚の字を書いたときも筆を懸て一めたるやう
な書風の書もあつた人の書きやうに書くとたゞ
こんと異なる所がある更なる又画に於ても後
の画にかき難いことを文で書くとたゞの書の延長
と見るべきかと説き更なる松牌看殿の方々及び
昔の寺社の額をいふ衣箱を始め其人の位に拘
らず天下の書も一書かたのことか例であつた
近年の勲章があらうけん書は松の書かたのこと
支那の口伝の書もいふべきやうなる書道や高麗

雲坪翁の靈も微笑む

遺墨・親善の使ひ

逸品を滿洲皇帝と米大使へ 志士の風韻いま輝く



故長井雲坪畫伯

明治中葉における日本畫壇の大先輩、長井雲坪先生三十五周年遺墨大展覽會は同朝野會及び先生の臨れたる人格、技量をしのぶ諸名士

渡支の希望はますく燃えさかるばかりで彼はこの壯心を當時來朝したアメリカ宣教師フ

の昔フルベッキ氏の決死的行爲によつて完成した藝術的眞蹟を傳へることによつて日米親善の契機たらしめんとす

計畫を たてゝみる

雲坪翁の數多多彩の生涯は數多の逸話を生んだが、その師恩に愛する精神は全く後世の何者にも見ること出来ない深く美しいものがある、ある時恩師の遺墨が弟子を連れて千葉縣に居住してゐた實藤翁を訪ねての贈答書として死に託した、この時雲坪は「普通ならば自分が高弟として隨行せねばならぬ處だそれが行を共にせぬばかりに先

取入れ

てゐるといふ處から翁の勅した贈の遺墨を同朝野會に献上して故人の遺業を廣く顕彰することになつた(寫眞は雲坪翁の作「遺墨」)

新聞

によつて十九日を初日に二十三日まで續行する上野の府美術館で開演される、出陣されてゐるのは山水、四君子、人物、動物等およそ三百點に達してゐるがその筆調、意匠、枯淡の筆致は正に翁の人格と共に志士の風心を以て畫面に顯つてゐる、また着色畫の如きは濃淡、明暗が巧みにとり入れられたか油繪の觀を呈し、従来の南畫に類例を見ぬ程の逸品ぞろぞろで荒木十政畫伯をして「雲坪以後に雲坪なし、全く獨擅をくわへ歩いた人だ」と敬慕をもちました程だ、處が遺墨展がはからず日米親善、日滿親善の美しい契機にならうとしてゐる好話題が傳へられた、雲坪翁は新潟縣沼津の人、嘉永元年の春十六歳の時長崎に遊び畫藝進修に師事したが、更に支那に渡つて南畫の心奥をきかめんとした、しかるに當時は徳川幕府鎖國の國威が嚴峻と國民的海外發展の雄志をはぐんでゐた時代で、これを敢行せんとすればどうしても國威を犯さねばならぬことになる、しかし彼の

フルベッキ氏に訴へた、彼こそ日本文化の發達に貢献した恩人で、實に伊藤博文、大隈重信、井上馨等維新の志士の恩師であり、高橋孝相の恩人である、これを聞いたフルベッキ氏は「それでは死を賭してこの大業を成してやる」といつて恩師三年彼と共にひそかに支那に渡り、彼をしてつひに目的を達成せしめた、この恩義に深く感戴した彼はフルベッキ氏の死後同氏の會葬を催さしこれに香華を手向けて日夜痛悼し、死の瞬間まで恩人の冥福を祈つたのであつた、この際れたる感動的なエピソードを知つた朝野會の人々は雲坪翁の謝恩の精神を更に意氣あらしめるために今雲坪の會心の作を註日アメリカ大使グルウ氏に贈り、翁がそ



フルベッキの死後と據りて
耶の海つれことをわづ得れ
侍ハフルベッキの位牌を
常々はたかつかきし礼稱
を怠らざるやうにと云ふを
ある彼の肖像の初めを
とて見ることも得れ
或る人に差入らんまきやあ

出身のちがが、福造は、然るものと云え、先輩である。海
軍省に仕へて、主計監と云ふ事、海軍中將である。
此人と早稲田大等の二推奨、此人、山本権兵衛伯也、
大隈、推挙、此の、七く早大に入つた如く、
河故郷と教う、遂に、此の、身、成、長、い、あつ
た。外、回、り、お、れ、此、の、最、酒、家、の、身、体、の、宜、ま、り、
大、大、過、き、性、年、疾、患、に、罹、つ、て、か、う、或、人、と、酒、を、
一、比、が、再、来、健、康、が、餘、つ、優、れ、七、十、の、賀、を、や、つ、
頃、七、終、り、授、子、が、さ、う、さ、う、に、さ、ら、に、教、育、使、
た、の、七、終、り、不、幸、と、云、ふ、事、も、つ、た。 四月廿一日、宇都
野の先お式、時、み、ゆ、ま、之、ん、を、お、す。
○此の友人の病歿するの、相、評、を、頻、りに、あ、ら、う、ん

福造

ハ、因、り、宇、都、野、の、病、歿、を、聞、直、に、其、の、傳、説、を、あ、ら、
う、と、し、て、身、を、し、て、あ、ら、う、ん、と、い、ふ、事、も、あ、ら、う、ん、
こと、を、あ、ら、う、ん、聞、く、事、も、大、多、く、回、幼、生、の、彼、の、法、
律、を、あ、ら、う、ん、に、お、生、ん、か、年、途、に、年、暮、り、と、三、三、
多、く、大、多、く、時、代、の、事、業、を、あ、ら、う、ん、さ、ら、な、り、と、い、
あ、ら、う、ん、大、多、く、時、代、の、事、業、の、こ、り、了、社、に、入、つ、て、編、輯、
業、に、あ、ら、う、ん、及、時、を、や、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
此、稿、の、全、集、の、時、代、の、聞、の、後、に、自、分、と、い、ふ、山、山、
一、事、の、日、報、社、橋、上、の、福、地、と、編、論、を、聞、い、し、た、こ、
あ、ら、う、ん、聞、の、政、治、生、活、の、事、業、を、あ、ら、う、ん、主、場、の、異、つ、
お、れ、か、遂、に、其、の、園、に、入、つ、た、こ、り、と、い、ふ、事、業、を、あ、
と、終、つ、た、自、分、の、二、三、ヶ、月、前、執、行、の、潮、人、に、あ、ら、う、ん、

場ひ合しれ、又は自分のお縁か、こゝに逢つれり、別荘も
こゝに作るつやむ、其地をたしつゝ、あつれと云ふれが、こゝ
か相見つゝ、最後じ、其後、向せき、入院しれり、い。
この記を心つれり、四月廿一日午後、今朝即廿二
日の朝、まゝ、死、廣共が、おぼし、出てあり、自分の遺徳を
細し、此の既、殺してゐれ、こゝか、あつれ、四月廿二日、
〇江戸湾、今、海鮮の味を、以つて、誇る、昔、い、を、あ、と、
い、也、あ、い、と、い、き、い、ら、う、し、ら、う、と、い、排、斥、し、ら、う、と、い、
か、江戸、用、府、草、創、の、う、ら、や、あ、い、ん、偶、武、井、標、
江、(天、保、年、間、の、)の、魚、鮓、を、測、す、ま、江、戸、前、る、
魚、鮓、の、昔、生、る、記、を、左、の、如、く、さ、し、て、あ、り、
諸、島、社、本、河、沖、に、い、こ、う、や、生、る、こゝ、の、所、謂、江、

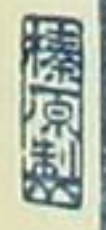
江戸前

江戸前と移るゝ、後、あ、い、と、い、き、い、ら、う、と、い、昔、い、の、を、あ、い、
い、や、あ、い、と、い、き、い、ら、う、と、い、我、も、い、と、尾、花、う、け、ら、
志、げ、ん、の、う、べ、を、前、き、り、開、き、月、の、入、り、山、も、て、く、海、
る、の、君、の、あ、い、を、い、ら、う、と、い、る、ま、あ、い、ん、草、鮓、堅、盤、
に、さ、い、く、ま、い、花、の、大、江、都、と、い、ら、う、け、ら、い、海、
の、跡、を、あ、い、と、い、鐘、め、り、注、入、の、厨、ろ、の、海、鮓、を、い、
ら、う、と、い、め、焼、肉、と、い、ら、う、と、い、鮮、魚、の、あ、い、か、い、か、い、
鮮、魚、の、跡、を、い、ら、う、と、い、巨、素、堆、き、も、家、一、尾、の、鮓、を、
細、く、う、り、鮓、魚、の、跡、を、い、ら、う、と、い、吞、舟、の、鮓、を、い、ら、
魚、ま、い、と、い、ら、う、と、い、と、い、輸、す、と、い、ら、う、と、い、
此、今、あ、い、と、い、ら、う、と、い、き、い、ら、う、と、い、あ、い、と、い、ら、う、
者、ら、酒、よ、と、い、ら、う、と、い、先、れ、の、よ、う、の、飯、を、い、ら、う、

江戸前

炊め家ともなひ、あんなに産り納ひまゝに主の旨
定むるに難く、溝漣に米汁を色づく末に川分
川おんを為す甘く、海入る潮七亦甘し、お
生とけしものを漬すの母の味も同しく潮
船を煮下、塩を出すの利、海にこそなるとい
ふ、活動よめる、粒をわ白し、ここのは
前と種ありとも、東方生育の陽氣を
けし生じ、五穀滋味の旨甘を合つて長
ねを味伴のこころ、味のこころ

江戸湾魚族の肥料、今の海も下流と氣づく、若
戸の吐き出す米汁や滋味の溝漣を任る海、今
まゝに魚族を育つ、こころ、他所もよい、美味を生



す、この早くから言ひ説くこと、が、いんれ、東方陽氣
を養ひ、ぬれ地に海に存在するから、わあ、大
合が、ぬれ、魚族、影地吉する、いんれ、こころ、こころ
出来る、他所の魚類を江戸湾に移し、備へ、時
を任ん、味、こころ、こころ、親と、魚、鮫、味、かき、
親と、左の、ぬれ、こころ、こころ、

下流、鉦子の、この、大、こころ、こころ、味、かき、
を、江戸、海、一、月、を、海、お、け、の、美味、を生、か、江
戸、海、自、然、生、ず、る、の、状、わ、さ、さ、と、い、い、ぬ、れ、味、
極、し、よ、う、の、ぬ、れ、へ、な、る、か、く、さ、さ、さ、大、能
の、し、き、に、附、き、ま、る、を、品、川、を、取、り、と、あ、る、大
こころ、わ、さ、さ、海、の、産、を、展、き、こころ、こころ、

のむ道方をもか目考病の原因とあるかおゆいぬ。頭乾
ハ今乃一糸の白くく老々若々としてあつて老衰と
七云へぬが、膚腫かすくすく肺も故障があつて
別々の時、性之病とあることもあつたが、此の病の想ひ
もつたぬよむあつた。自今七既と衰老の憾をなして
島の輔けを俟つことか少くすくすいづる業一此病が深
まつてハ老病の上のまゝ其憾もあつた。老衰のまゝい音
目び良人が手を引いて歩むくのをいつも氣の毒と思
つてあるが、自今七島の手を引くやうなまづつてハヒ
あつたの懊悩を林か得ず、品及田後と祈つてある。
(四月廿三日記)

○目下上院の美術債は三百五十五元長井雪村の畫幅



2日とさういふ早業中家花の雪村幅の一回一
幅と云ふ出づる雪村の二二三の腕んがあつた此幅
は淺絳秋景山おんが、雪村の心中傑作と云つても
のん、畫柄は山河の二三の人家を畫し、一岸高き待
えて、遠く海の口をきと見え、秀潤の氣が
漲り、墨氣淋漓なる家に、アットめと云ふ一のぬ。
紙後くると、雪村の侃者といふ畫人のあるが、氣格を
論ずると別座雪村に及ばない。雪村のちくけ
木をいふといふことと、雪村の似れ、雪村の山田
新川の待、雪村の大雅人物像に似たとあつた大
雅に、雪村といふことと、雪村の南畫の精髄を
得た、自づから、田村といふことと、雪村の心づ

一 日本はばくちの嶺もさくらが一葉
 一 此やうな末世をさくらにけけり
 一 昔の遊跡のや花が開けいひく中日
 一 うらぐとのとけき春の心も白ひ出る山梅
うま
 一 天からむも降つたやうな梅の一葉
 一 下の戸衆の左も陰翳する花の陰一葉
 一 死はふいばせくとさくら一葉
 一 今の世や花見かてらの小盗人一葉
 一 咲かてんば梅の人のおらまを梅の使はさく
 くらりけり
 一 是程のけちな梅も一葉
 一 花の昔も遊跡をさくら一葉



一 日本は這入口からさくら一葉
 一 吹けん飛ぶ任君も春を梅の一葉
 一 二日酔いものかい花のあるあひだ
 一 鐘はわたの香を掃く一葉
 一 うらやまの心のまに咲きせとさくら一葉
 梅の嶺の一葉
 一 春の世の人かちさくら一葉
 出らぬ一葉
 一 みどりの梅のさくら一葉
 一 歌人のそよぎの花を山をさ
 くら山一葉
 一 土留山ここの梨の尻あくま一葉
 一 木のもは汁も一葉

一 藤原の山とよそふて花見の事 思ひ出

さくらを意の句のさくらもも多くのさくらもあはれ 梅を四先
とて誇りのさくらも免れぬさくらを形なきさくら句七
茶風天からの降のさくらやうと梅うふとさくら句七
ハ形容がまけさる梅を藉りて世を嘲つたさくら句七
不承を漏くさくら句七ハ梅の教つたさくら句七
あつた風はさくらを羨やさくら句七ハ心なきさくら句七
さくら句七ハ梅が咲くとさくら句七ハ死文が咲くと梅の
と感慨を漏くさくら句七ハ興味を感ずるさくら句七
を賞するのさくら句七ハ歌人の北山を採する
言葉のさくら句七ハ山を採するさくら句七ハ山を採する
十首のさくら句七ハ梅を採するさくら句七ハ梅を採する

藤原の山とよそふて花見の事

を決る歌句のさくら句七ハ武士の掛けた梅の歌句の
欲しい。史蹟とさくら句七ハ秀句の欲しい。上野のさくら句七
分の手帳に折く梅のさくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅の
七梅のさくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅の

四月廿二日

口来田から先は酒東のマーカス、シヨウの大一座七堂
ハ大徳を固め登壇のダンサーは一紙の梅のさくら句七
裸であるのさくら句七ハ君子の日本を之れを素の梅のさくら句七
けけの梅のさくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅のさくら句七
の、或る人の梅のさくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅のさくら句七
さくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅のさくら句七
あふの梅のさくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅のさくら句七
梅のさくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅のさくら句七ハ梅のさくら句七

の裏面と立ち後れ、内山田の裏面とのおれから勝つたのせいで
るが、其の故を以て更に味方やアメリカに勝つと
誰の利益者たるを得るものか、陸軍の實力の比較は決
する兵力兵器の比較のみが判明するだけであらぬ、海軍
力工業力國民の体力皆の優劣を決するのフアリ下れ、あ
るが、此等の點に於て日本は確たる劣つてゐる、然るに日本は
自惚が強く力を回さずして進出を敢てせんとしてゐる、
陸海軍の擡頭するより、其の二倍の一徹せよとの
と、其の事は、丁度田口ロシヤの革命前、こゝに似て
ゐる、ロシヤも軍人が擡頭して、民衆は自由を要求す
る、田口ロシヤも日本も将士と其の二舞を為さんと
してゐる、何れも日本の政治家はロシヤや帝政の如く、こゝに前

田口

のれかと何れを檢討し、そのをあらうか、日本の内山の
筋、中世則の遺風が支配して、吾民は今も封建
的従属状態を居る、日本の政治家も中世則の習俗を
利用してゐるが、吾民の革命的擡頭、ロシヤも、
既に現るに比して、其の中心者のストライキ、吾民が労働
者と協力するところ、傾向、更に、皆彼階級も不満の
勢を起し、其の勢、此の階級から支公更上級軍人
の出て、比、多くの學校、非合法の秘密結社が行
は、中産階級、軍部と係存するもの、其の軍閥
の格力を厭むもの、軍部の首魁、資本家達
と睨み合つてゐる、吾人がすんで他人に不満を抱いて
ゐる、國民の一致がよいことを望むところ、尚ほ是れ

少くも朝鮮、臺灣、滿洲、日本の植民地を擁護しておるから
一相事ある時、拾収のつかまぬ状態を現出するにあらざら
んから日本は噴火山に居るやうなものである。

取りも付かず
新機軸
千とこと
やの七夜
の劇と踊り

北は日本の弱點を感ぜしエキテロしてゐるが、外目では
を披せたいやうである(相牽)といふが、他の山の石と
北内から教訓を得ること、日本が既性の敵多
く利益を得ること、平素は今後も為政と立行す
可からざること、自惚ていへけいこと、もろく日本
ハ中世の氣分を脱し得るに、國防費の
多端をも、割合に産業の併進せしむること
をいひ、確りまてロウキー、事ふこと、いふこと、
吾邦は深くこん界の世を憂ふとある。

○外回りの答、何より一本毎に高標のレウテールが、
その世界のやうなものである。こんらん相も長道も、
一と金をむむ飾りし重々紅毛び印刷さるゝのみ、
葉巻も喫つた家々、自然と人が積つて、或は子供の
玩具に供せんや、或はものを材料として、細工をな
すものがある。いつてもや、何の長途にも、伊豆春放
夫人が此のレウテールをあの小屏風に貼つた、女の
見れ、ことある。西洋やも、何者ある。此のレウテールと
貼つた人が、裝飾したものが、あるが、小楠瀬、日年が自
家のレウテールを空のせう、見れ、ものと、さういふ
念入い、ある。一鶴を、大さる、枕蓋のこと、き
外面、漆の塗つた、名を、特、生、つて、さう、或、十、行

のレットルが錯綜して燃え、金色の毛も赤福も昔の互ひ
 吹散して印度の絹更紗の文柄を又つこの如く燦
 爛とあざとさでえん、硝子が牡丹をえん、硝子瓶
 抱ゆか風透いしえ、此の硝子の縁と漆器の合せ目
 ん銀のフーリ輪かつりてあめめ、何事も精巧に出来てあ
 特る余る世つる、は見えぬとあつて、レットルは工
 下の形が出来て、余の歌文字があらうれとあつて、此の
 レットルのあつて、外務省の工口ナ、工口ナの子
 本
 の九十回の高價の、このあつて、徳のふや、硝子の煙
 茶のレットル、や楠、の無私、出入り、と、委、集、し
 九レットルの自然に、積むの、此の、を、応用、し、此の、と、え、ん、が
 だ、い、く、あ、る、の、し、の、か、あ、る、

珍しや寫樂の肉筆現る



この大発見と同時に、野原、野原、
 戦年代の大家を感動させた肉筆
 の傑作十七點も発見された
 寫樂の肉筆としては明治四十二年
 日英博覽會に出品された「五代目
 十郎の景清」を畫いたものと、
 寫樂研究家として知られてゐる小
 林文七氏所藏の「七代目十郎の
 景清」を畫いたもの二點といはれ
 てるが、小林氏が景清でなくし
 てから、最早や日本における發見
 は絶望と見られてゐたものであ
 る、今度世に出た肉筆は女形源川

日本にたつた一枚しかな
 かつた寫樂の肉筆——そ
 れが震災で灰にして以
 來、絶無視されてゐた
 所、此種大作二點が書大
 名の秘庫から發見され鑑
 定した新泉の權威源川
 風博士をして「世界の偉
 大発見と推稱せしめた寫
 眞上は五代目十郎の立
 姿下は女形源川路考とい
 つれも寫樂の肉筆」

日本にたつた一枚しかな
 かつた寫樂の肉筆——そ
 れが震災で灰にして以
 來、絶無視されてゐた
 所、此種大作二點が書大
 名の秘庫から發見され鑑
 定した新泉の權威源川
 風博士をして「世界の偉
 大発見と推稱せしめた寫
 眞上は五代目十郎の立
 姿下は女形源川路考とい
 つれも寫樂の肉筆」

十郎の畫を寫した重立と半四
 郎と路考の姿を一つ鏡に寫した
 「鏡中の鏡」とでもいふべきもの
 で、それには「慶應義塾七年陰
 月、於東遊園、寫樂畫」の署名が
 入つてゐる
 〓
 この外源川博士をして推稱せし
 めてゐるのは享保時代の大家、
 櫻月堂安度の八人の遊女を畫い
 た六曲びうやぶである、版畫で
 さへ美人一人の價千圓と稱せら
 れる安度作の、しかも肉筆とい
 ふ、今度世に出た肉筆は女形源川

源川博士曰く「世界の大発見」

源川博士は語る
 秘藏されてゐるのは某大名華族
 で春睡庵と號されてゐる、十九
 點の肉筆を拜見したが、いづれも
 得難い珍品で絶望と見られてゐ
 た寫樂の肉筆が然も立派な保存
 のまゝ二點も發見された事は世
 界的發見と思ふ、この十九點の
 筆價は一十餘かしが、まづ十五
 萬圓から二十萬圓のもではな
 いかと思ふ

〇此の書は美濃守の定む後志守今の〇八合とて例の
雑談に載せし。而も其の書は胎内証一巻を示さん。元
の書つて見ると小形の書と云ふ。三合付書は白金の
寶篋院蔵尼が書いてある。其の書は寛文二年
九月丑八日書深とあるが、恐らく胎内証の最初なる書
に外に版木の古印謄を示さん。この巻頭二一
巻の古印の書は全部此印の書と云ふ。此印は今
珍くしてある。或る時代は此書は
と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
の序跋の書の中にも其の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
其の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
序に此の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。

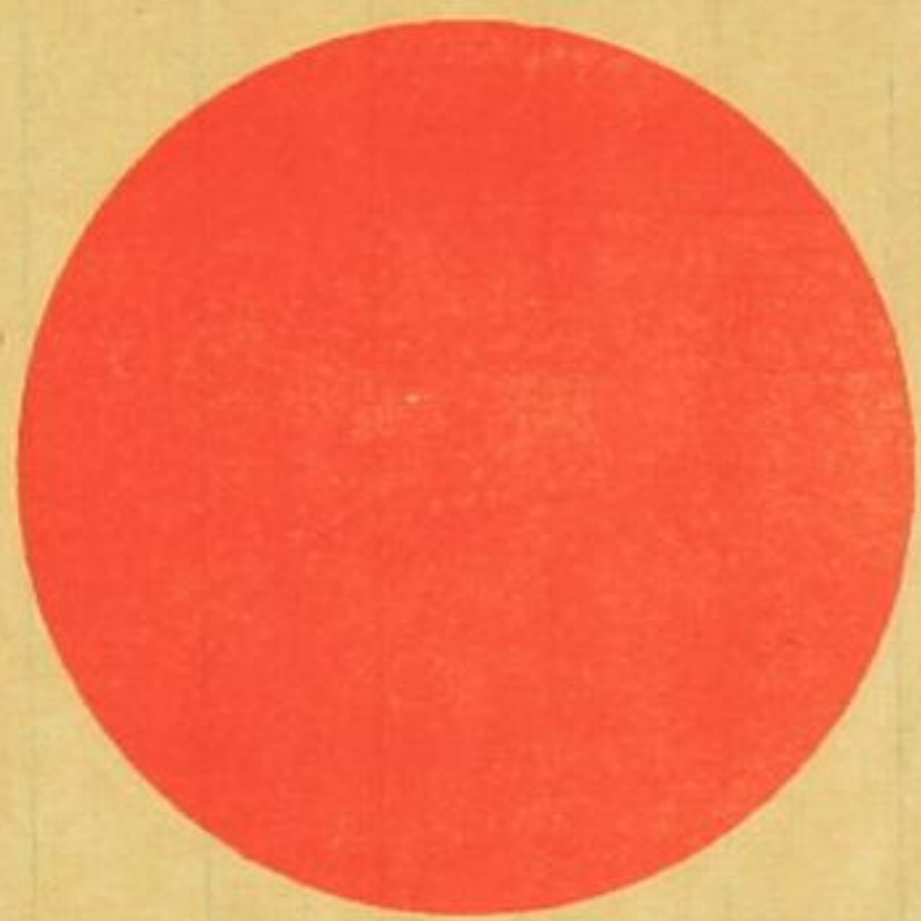
此書は古印の書と云ふ

の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
其の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
序に此の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
其の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
序に此の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
其の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
序に此の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
其の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
序に此の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
其の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。
序に此の書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。此書は古印の書と云ふ。

○素心漸せし日本家園に訪ひて来れいつ七魁として
花と花をまじりて争ふ如く白花が枝に満ちが忽ち散つて
仕暮る、今い山吹が咲き乱れ、鉄柱の牡丹が一花と花
く藤棚の藤も五つ六つと花を垂れんとする、花の葛も
七六七寸と延び、葛も真赤と紫を出して、園内
に品々多い根付が皆花をまじりて新緑の早業が詢ふ
て来た、楓樹の庭の衣裳をえんがあらあううを隠す、
今い藤家の庭もよく、古布の意前の既と老法をまじ
てある、楓樹の初夏、○満目新緑の節のけをま
まを脱せぬと思涼の感も、枯れぬ枳やハツ子や隠
ん葉や黄楊も、他、常盤木がある、○わうやう庭
庭と信じてゐる、園に藤やう味を添く、○わうやう楓

樹からう、楓樹もいろいろの種があるが、○わうやう楡は
色のまじりて終ねする、○わうやう楡葉の楓樹と映
花するのを趣をまじりてゐる。
新緑の時節、○わうやうと氣候が温暖ひあるから、庭
に出て歩きたる氣が起る、○わうやう庭の庭に出る、
今い、○わうやう執事、○わうやう侍のい出る、○わうやう寒が散る、○わうやう出る、
時節、○わうやうと推くる、○わうやう鉄を推くる、○わうやう新芽の出る、
い、○わうやう樹の葉が盛ん、○わうやう冬今、○わうやう霜雪を、○わうやう花け
んと枝が折れ、○わうやう枯れ、○わうやう冬今、○わうやう氣が、○わうやうち
ちと、○わうやう閑却、○わうやう比、○わうやう陽氣が、○わうやう温、○わうやうち、○わうやうち、○わうやうち、
ちと、○わうやうち、○わうやうち、○わうやうち、○わうやうち、○わうやうち、
指を去ること、○わうやう勉、○わうやう庭、○わうやうち、○わうやうち、○わうやうち、
切ん

仰あふげ護ご國こくの御み柱はしら



現あらはせ靖やすくよ國まごころの赤心

靖國會

東京朝日新聞社 機上より

朝子くから打揚げん
棧上しし元以來つて余
の家國に墜らん四族
方ポスターハ数條の及
んが、紀念を、こゝに
紙を存しおく

昭和九年四月廿七

○赤穂の仇討兵衛
ハ新島方田の中山兵衛
ハ美濃子方田の兵衛
ハ美濃子方田の兵衛
ハ美濃子方田の兵衛

東京朝日新聞社

あむサ現あらはせ靖やすくよ國まごころの赤心
のむきと印刷し附すことなきに
頼んが事な。其條の流しと此の
の御像と連てたことを始りし
第一カ 大石が海客を清んが
愛憎をつたへた。まんの大石
ハ〜〜〜大石の像と〜〜
義士の首級を〜〜
の比喩か〜〜寺の住持〜
まつけ〜〜いん〜
つて見ても、誰よりも古田松陰の遺蹟を
スモ忘らん〜〜いん〜

おまの關係を注列し、ちよび答へてあることと思ふ
と、こゝも同巧の経緯ともあらひ得る。うゝ、

〇あをいれたことも、漫畫のつき思ひ定まるることを先以
北冊子に書きつけた縁固から偶々坊間、大正十三
年細木原吉(北)の著「漫畫史」を讀
て一考したか、一二氣の附いたこともあつたが、北著
者七元公研究して居るやうな思ふんを先づ漫
畫の定義と就て、北の著者、純正美術が美術
物の執筆者として、こゝを第一義、置くるが、漫
畫は人世の模倣を喰ひ入つて其実態を穿つて
第一義を置き、美を其次にも置くと、けのね
あひあるが、其第一義を現はすたゞの表現法



に依つて何れの拘束も受けつゝるゝと、捕らぬ鳥
は純正美術に對して大自由がある。と云ふてあ
つた、こゝの漫畫の或る特徴と道徳もあつた、ち
よび全部を云ふて居ると思へる、いづれ漫
畫のモット何の條件があるかと思ふ、人生の
模倣、喰入つて其実態を穿つと云ふ、其領域の
川柳も七回一むあり、書春畫も、ちよび漫畫に入ると、
ちよびが、是れ此畫、屬する、亦漫畫、人生の
模倣、關係のする、奇怪のする、漫畫に多く、例へば
福木、翼大の著る、形も圓ちむ、人生の模倣、
解きぬる、あつた、思ひ定まる、漫畫がある、ま
ての漫畫、必有とも云ふん、ちよび、多くの場合諷刺の

寓意がある。人物の至微を穿つ不手おのつから諷刺
があるところからやうが諷刺と云ふこともあつたらぬこ
とあるから、它義に諷刺の條件と云ふべきと思
ふ。エモア七一條件たるを以ての漫書は多く
可笑味がある、可笑味が諷世罵俗ともなるの
ん等を嘲いて、或る人生の至微を穿つても漫
書といふらういであらう。

此の漫書は自己自人が氣のついでに、狂言である。狂
言の舞脚も大概主人公が馬鹿で太郎冠者が
利巧である所に嘲世的諷刺的の意の義がある。
狂言の舞臺と決せん、是れ自由と云ふんれんこと
注意すべきであるが、何故うんれん漫書と云ふ書

かんきうのねがはか、えんじこもひの漫書の表
近である。エモアのあつたこと、言のまもやあつた。そ
一つの義の附いこと、録会時代、録家が入つて来
た、形式方便を要する、その理、其の基つき倫
画の如き、色彩を忘る、枯淡の水墨と云ふつれ。
此時を漫書の大い、起るべき時であるの、起る
らう、うれんこと、空手う、一、そのある。諷味と結合して
自由畫が起つれら、あの謎のやうな謎の問答のや
うな画が起つれら、お七ら、い画が生れ、あつた
に、後の起る、その、白隠ら、諷味ある漫画
と云ふ、録家、并、室町期、或人、と云ふ、自宋
畫一點、張り、と云ふ、れ、め、國、と云ふ、と云ふ

書物に潤き、飽き、倦むと誤解せし、是れ多分
堅固しいものがある、乾燥無味である、書法その
るいふ興味である、娛樂的のものとある、
と、コンナ風の叙述をきける、氣味がよい、
故人の筆の筆の、何と考へる人を悦ば
く、あるものが、大震災の文獻を追憶
し、典籍の廣博、此方の首部、出てある、
此が二十項、今つて公刊、著者の家、
の永久に、此書、
こ目録を収める、
稀缺がある、
其頃の如く、

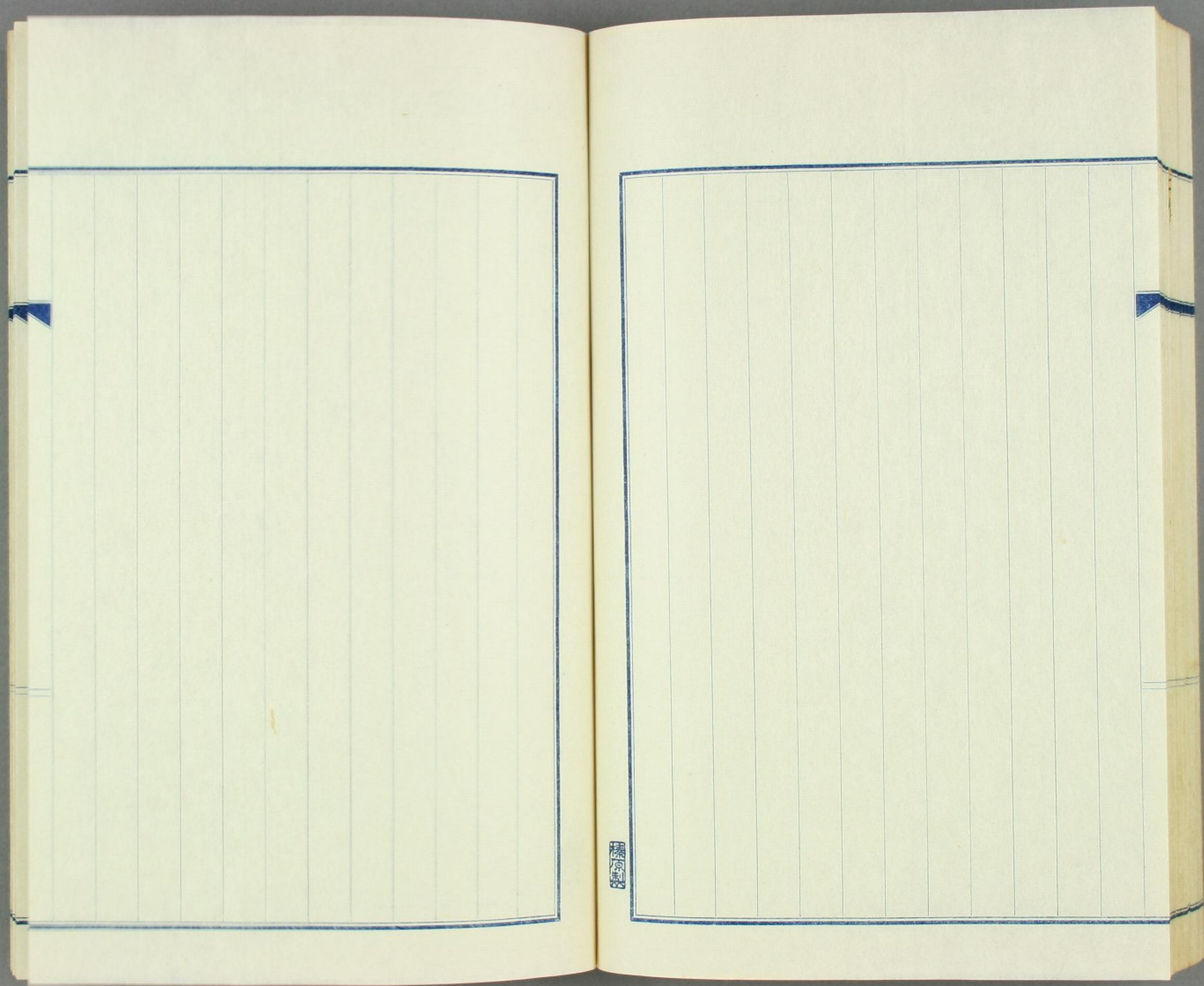
書影

興感と惹き起す、
解し、
又、
一、
こと、
る、
席、
あ、
も、
起、
あ、
か、

彼を他種各家各方面の交渉があつたから、その材料も
豊富で且つ的確である。一部の者として出版せんとし永
久に珍重せらるべき價値がある。

「書物生活」といふ点の長處があるが、此の点の中樞と
なりしものゝ、如く其の書籍を有名に置くべきか、其
の選定者の誰のかが考へるべきであるが、各々好む所を
偏して書架満ちたといふは、深きも研究しつゝのよ
いあるが、其の選定者の選定の困難問題である。東西夜
々選書の選り及べんが、固く取捨の宜しきを
知しつゝせんか、或る他邦の可とすことゝを一概に我邦
に採りて可とすことゝ出来ぬ。吾等の持つ日本の書
物に是れを以てせんか、或る魂氣よく研究し

彼を以て書架満ちたといふは、深きも研究しつゝのよ
いあるが、其の選定者の選定の困難問題である。東西夜
々選書の選り及べんが、固く取捨の宜しきを
知しつゝせんか、或る他邦の可とすことゝを一概に我邦
に採りて可とすことゝ出来ぬ。吾等の持つ日本の書
物に是れを以てせんか、或る魂氣よく研究し
彼等を以て書架満ちたといふは、深きも研究しつゝのよ
いあるが、其の選定者の選定の困難問題である。東西夜
々選書の選り及べんが、固く取捨の宜しきを
知しつゝせんか、或る他邦の可とすことゝを一概に我邦
に採りて可とすことゝ出来ぬ。吾等の持つ日本の書
物に是れを以てせんか、或る魂氣よく研究し



2020

以下
3 丁
白紙

乃木將軍 逝いて三十二年

ゆくりなく世に出た 夫妻「自刃」の記録

一昨日、日本醫史學會例會にて 西宮博士 當時の檢案書發表



今更のやうに武人のたしなみがしのばれる、檢案の模倣はつきのやうである(寫眞は在りし日の乃木將軍夫妻)

て頒布した、それがどうした譯か押収されそのうちの一部が轉々として最近乃木將軍の書藏家として有名な竹中嘉十氏の手に入つたもので非常にめづらしい貴重なるものである、そのまゝにするのもどうかといふので今度醫史學會で自分が報告したわけである、なほ檢案書中、將軍の腹部に三條の切創があるといふのはこれは武士の切腹の正しい型で、それを將軍は知つてをられて行つたのも頸動脈を切斷自刃されたのである

大正元年九月十三日、明治大帝御大喪の當夜、乃木將軍夫妻が殉死されてから今年で廿三年になるが、ゆくりなくも、さる四日に開かれた日本醫史學會五月例會で、當時遺骸を檢視した醫學博士西宮金三郎氏によつて發表されたが、それによると當時詳かに知ることを得なかつた將軍夫妻自刃の模倣が手にとるやうに明かになつてゐる、殊におどろくべきは一度將軍はシャツをとつて切腹し再びシャツのボタンをかけて後悠揚自ら軍刀を持ち直して頸部を刺し貫いて絶命されたその態度である、なほ檢案書によると將軍は宿願の脱肛を防ぐためその方面の手當をまてしたことが明かになつたが

胸部の中央

心窩の上から(月山貞一の作)で外方に向けて胸内深く刺せるものとおぼしく劍柄をまける白紙は全く鮮血に染みたり、衣服の胸部にあたるへん一帯は悉く暗紅色の鮮血にひたされ、直下で、衣服にさへざられ一センチだけ除き六寸三分の模倣は全長胸内に刺入し、刀尖わづかに缺けたり

貴重な文獻

西宮博士語る

この檢案書は岩田凡平氏が醫視に報告後、六〇部ばかり寫し

胸の骨を著し、一組の骨せよき構の下に胸骨の紐を兩肩から約二尺二寸五分水と重箱のものを著け黒色の靴下をはけり、刀身二尺二寸九分の兼光の軍刀は柄は兩脚の間にあり刀尖は前頸部甲狀軟骨の下に刺入せられること約七寸、刀及は右方に向ひ尖端は左頸部の創口の内にあり、脊は赤線のある黒ランヤをはき、前側は膝より上唇と血液に浸されたり、ボタンは外さずメリヤスシャツには疵なし、これを脱し腕部を換するに襦袢に被はれたる腹部には

皮膚切創あり

しかも襦袢に切痕なきをもつて一度これをまくりあげ胸腹再び被を解かす

大小三條の

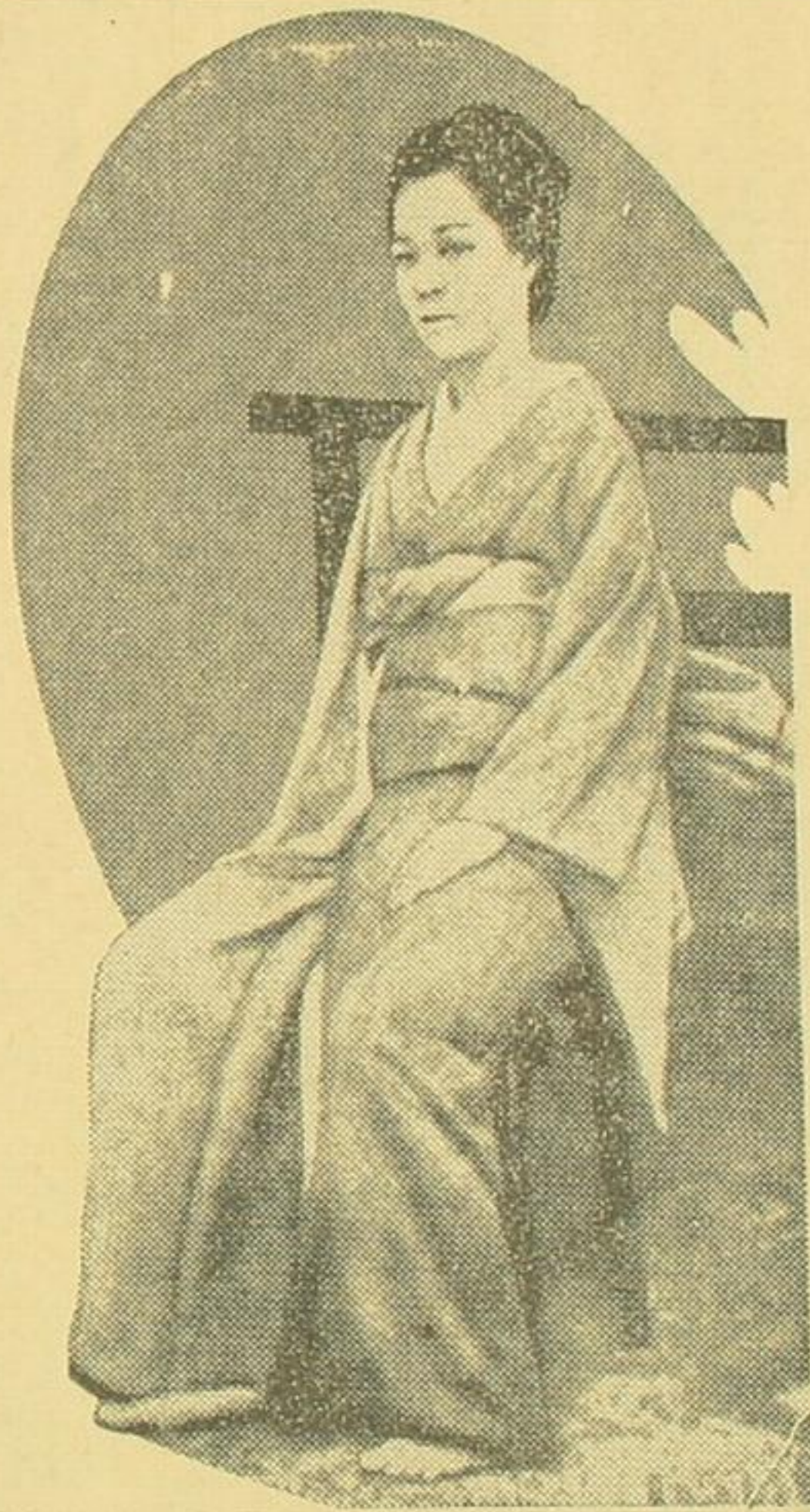
色の麻衣二枚の下に白木綿の襦袢三枚をかされ、白綿の帯をよき白腰巻、白足袋を著し、衣服の紐

夫人の左側

一尺ばかりの

とる及前側には暗紅色の鮮血をたへてゐる、將軍の遺骸は軍

◇横濱で発見されたお吉と傳へられる写真



ハリスとの交渉は 僅か三日だけ?

再度の勤めを哀願

裸のお吉

【静岡発】日米外交のいけにへととなり
情人鶴松への悲愴に身をこがした俵枝
お吉、天啓の美聲から「明烏のお吉」と
謳はれた「唐人お吉」は、小説や舞台の
世界に華やかに彩られてゐるが最近下田
町黒船祭で町役場の文書を整理中、は
からず想像の世界から裸のお吉へ引
もどす記録が現れた。通説によれば
お吉は安政四年五月廿四日(十七歳の
時)菊名仙之丞外三名の役人付添ひで
玉泉寺のハリスのもとにはじめて行き

それからハリスのもとへ通ひはじめた
當時ハリスが將軍へ國書捧呈前表面
上待妾といふことが具合恐かつたため
か同年八月一時お吉となつたのだがそ
の後も依然通ひつづけ文久二年ハリス
が歸國する前年(二十歳の時)まで交
渉があつたといふのであるが、この新
発見の文書によるとお吉が最初玉泉寺
へ行つてから僅か三日で腫物が出来た
のを理由に暇となつた

嫌はれた腫物

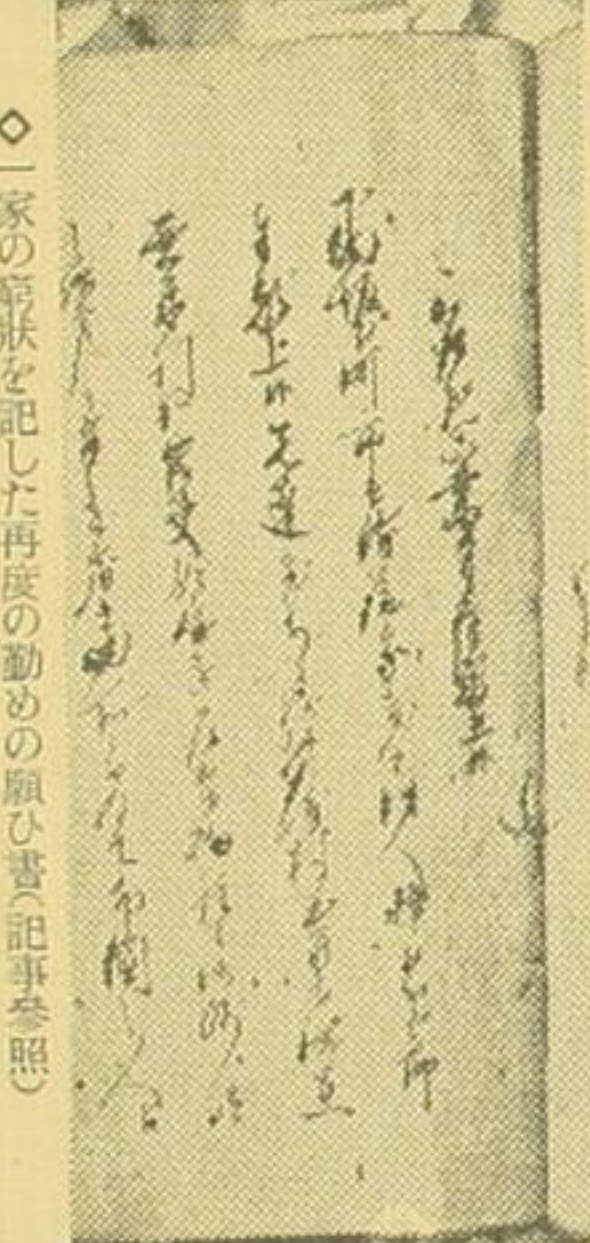
これに對し同年七月十日お吉の母
さわかからハリス御用掛に願書を出
し再度の御用を哀願してゐる事實
が明らかになつた、その願書の概
要は

したが老母きわとさらは渡世も
なく今まで上方から来る船頭の
洗濯等して生活を立てゝゐるたの
で相當の給料(年百廿兩といは
れる)を下さるとのこと、玉泉
寺へ出たけれども腫物が出来て
僅か三日で暇となつた、これは今
リスから歸られた、これでは今

までのやうに船頭の洗濯仕事等
も出来ず異人と交つては人に厭
はれ生活も立てゝ行けないから
何とか御救助願ひたい
といふのである、その後のことは
はつきり判らぬがお目見得には僅
か三日で「まつ眼を出されたばかり
か、美化された「明烏のお吉」が
一片の「洗濯女お吉」に願書して
ゐる、これは今まで数多いお吉研
究文獻にも現れてゐない新事實で
お吉研究に一つの波紋を投ずるも
のであらう

お吉の實説 を改訂

加藤忠雄氏談



◇一家の窮狀を記した再度の勤めの願ひ書(記事参照)

「唐人お吉」の新文書について静岡
縣立英文印刷書加藤忠雄氏は語る
この願書は今日まで知られな

つたもので、お吉研究の權威村
松春水氏の「實説唐人お吉」を初
め多数の書物にも現れてゐませ
ん、これによりお吉の實説が大
分改訂されることせう

ハリスには無
理押つけ
木村 毅

この手紙は非常に珍しい、一體ハ
リスは初めからお吉を避へること
は氣が進まなかつたので、たゞ通
譯のヒュースケンが非常に女好き
な所から「日本では女を持つてや
らなければ誤解はうまく進まな
い」と欺して無理矢理にハリスに
お吉をすすめたので、果して枕席
に待たせられたかかは疑はしいとの
説もあつた、だから三日行つた
だけで斷られて、そのまゝ願書が絶
えたと思ふのが本當たらう、現に
下田町役場の文書にも「三日で
斷られた」と明白にいつてゐる、
長期にわたつて情願続けたる交
渉がつゞいたといふ説は私は初め
から否してゐた

願書の全文

年悉以書付奉願上候下田坂下町
市兵衛後家様已同人伴惣五郎奉
願上候、先達きら旗本鶴村玉泉
寺滞在在米利加加吏部屋遺書出
候御種々御沙汰之次第も有之候
處當所におつて外國之入江婦人
御差出被遊候初而之御取扱二
而當人は勿論親類身寄之もの共
一團團届申御免御願候處町役
人之者再三取扱御利解之程奉承
伏一體老母き己並様は差向渡
世も無御座上方防過船上下當港
滞船之船頭共衣類其外洗濯等
たし今々營み居候折柄二付相當
ノ給分手當ニも相成候へ、老母
並き往々身分取方ニも可相
成心宛ニ而身寄親類之もの共承
知をも不願御聞入奉申上官吏
方江罷出候處きら儀近御願物出
來居儀三夜ニ而宅養生被申付そ
の後腫物全快ニも相成候二付其
段御高奉申上候處其官更病氣
之故を以て暫々差扣可申旨は被仰
渡候然ル處此たび亞人斷申候儀
町役人をして被仰渡承知奉申儀
二付きり身分之儀取方ニ差文
上下滞船之船頭共の上洗濯等
難相成異人江交候而は再度御國
ニ而取難相成儀親類共を始メ
申開候も並老母に此上當方ニも
放れ取難方難相成候間何事格別
之御仁恵を以御慈悲之御沙汰偏
ニ奉願上候右願之通被仰付候へ
難有仕合奉存し候以上
安政四年七月十日
右 市兵衛後家
儀 宗 五 郎
御用所御掛り御役人中様

○自公の常々を修福寺の鐘と添へて朝夕鐘ありと
聴き其感れをあらはれしことあり。亦宇江におんが晩鐘
と鐘と聴き其感れをあらはれしことあり。西陣の鐘と
陽氣を結結の如き目出なることを聯想せしめ日
本の佛友感化の鐘と云ふこと法の善考を想ひし
ことと云ふことあるが鐘ありを詩的び人の感化を
誘ふ事とするものあり。また感化の鐘は庶世の陰氣
感しぬむものあり。佛の慈言の家とある者の味がある
陰地の鐘をひき一年のこゝろのありから、そのありは
伴つて若くは脚腰の湧くものも自然と云ふものあり。又
昔一から陰地の鐘は夕くつてきことと云ふものあり。こゝ
とおもふ事あり。起きて美を樂んむ人かあると

日ラレオのちる世の中い七各地の有名寺の鐘は
とラジオを通じて少かせるが、鐘教するおのづか
糸のありて、鐘教も味ふ族、死から音楽を聴く
やうな鐘の甲乙の月且も心やる、大い鐘の鑄造も
女道の上の物根を凝らしたよか、老刺の鐘も多
くある心とん、鳴りたふけん、卿吉きもよく、聴
して其心氣を飛然たしく、あるよかある、邪念を
一掃せしちるよえのよとあるから、名鐘も引込
よか念し、此の古無死のよいこと、地今の世の中い七
の市都の漸や、静す半庭のこと、木頭と未の
鐘教の伝耳を洗ひ澄すすやうな氣かする。夫南
山、ててて、鐘、てて、鐘、か、白、日、の、鐘、

鐘の

己上の鐘と
つた法を
つた法を
つた法を

く鐘、てて、鐘、てて、鐘、か、白、日、の、鐘、と
歴史的のよか、何百年前、英飛、最傑、の、鐘、
を聴、て、て、鐘、て、て、鐘、か、白、日、の、鐘、
こ、鐘、て、て、鐘、て、て、鐘、か、白、日、の、鐘、
一、風、味、の、あ、る、鐘、が、サ、ラ、セ、ク、テ、ウ、エ、ル、つ、て、
か、ら、ん、感、受、性、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、
鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、
山、と、よ、か、の、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、
此、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、
文化、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、
用、て、ん、な、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、
難、い、こ、と、な、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、の、あ、る、鐘、

○開成のアウトラウンドム

一時針は昔より斗鶏とよぶに比較的近年出来た西洋時計の時刻の来るに、自れは雄が開いて鶏が都王をふるまうやうなのであつた。鶏の時と雄が離るるの。幕末の時針が船来して頃、今やうの鎖も世帯の法もよりのやうな根付もすこよのあつた。随分昔から時計をさましくいふかして或は字の形、灰を言ふも、えんく香を埋めて焚きこもんが全部焼けるか一時別心と云ふやうな針のこともあつた。これを香の歌と云ふ。今や七佛壇の香を焚くは斯ういふものがある。又宋元時代のそれ、銅と蓮花を

開成

リとんと斬りぬ上、深きも、あつた花の唐の穴からあか入ると終に沈むのも、時をも、因の、二んをいれよもあつた。

一井口基成のピアノ原奏の天才があるが、外圓なる中、大なる指が働きと入つて、常朝終るべく、静養の中であつたが、漸やく指も利き出ると、まゝて、昔の夜初め、つれなき、時人の、漢書人と、試み、こゝろ、まゝと、先づ、今も、今も、功ひ、来つた時、まゝ、脈、血ひ、指の、働きと、入つて、間も、まゝの時、心、あつたが、折角、まゝ、かゝ、置、面、も、其、成、功、を、新、の、比、が、此、處、の、形、況、と、まゝ、と、大、其、印、の、あつた、と、まゝ、から、先、の、あ、つ、て、ま、の、指、も、日、ま、ま、回、後、す、

入札消息

香雪齋藏品第二回の賣立

大阪藤田男爵家の藏品が四月五日、大阪美術俱樂部に於て入札に付せられたが、盛況裡に吳春の三幅對十六萬九千五百圓を最高に、總賣上高二百五十萬圓を計上された。主なるものは左の通り。

五萬圓以上

- ▲吳春松竹梅三幅對(拾六萬九千五百圓) ▲飛青磁花入(拾三萬五千圓) ▲柴田井戸茶盤(拾二萬圓) ▲古赤繪金欄手花入(拾萬九千四百九十三圓) ▲名物長次郎早舟茶盤(拾萬圓) ▲半江青綠春鶯起鴉(九萬四千四百九十三圓) ▲山陽天草洋七絶詩(八萬九千六百九十八圓) ▲竹田一樂帖(七萬七千三百九十八圓) ▲古伊賀花入(七萬六千九百九十九圓) ▲交趾臺牛香合(五萬九千九百九十圓)

壹萬圓以上

- ▲吳春溪間雨意池邊雪景山水及幅(四萬五千五百圓) ▲交趾櫻盤香合(四萬三千九百九十圓) ▲名物相坂丸茶入(四萬一千圓) ▲紅葉五器茶盤(三萬九千五百圓) ▲吳洲木瓜香合(三萬七千三百圓) ▲應舉春景山水(三萬四千三百九十圓) ▲志野橋繪茶盤(二萬六千八百圓) ▲名物定家卿小倉色紙(二萬六千圓) ▲古備前繪小判形水指(二萬六千圓) ▲熊野懷紙飛鳥并雅經卿(二萬五千九百圓) ▲花橋茶盤(二萬五千三百圓) ▲交趾共蓋五彩蓮葉茶盤(二萬三千九百圓) ▲交趾共蓋五彩蓮葉茶盤(二萬三千九百圓)

- ▲古伊賀香鉢(四千九百九十圓) ▲應舉中黃初平左鷲蹄花熊兒右雪中南天狗子三幅對(四千五百三十圓) ▲古瀨戸肩衝茶入(四千四百九十圓) ▲藤原時代五斗臺大卓(四千三百九十圓) ▲訥言鷄水中捕魚(四千二百三十圓) ▲大宋染付香爐(四千二百圓) ▲古備前德利(四千一百一十圓) ▲一休和尚一行(四千圓) ▲無準禪師墨蹟(三千九百九十圓) ▲青磁大鷹香合(三千九百九十圓) ▲不昧公三重切花入(三千九百九十圓) ▲古赤繪金欄手德利(三千九百九十圓) ▲唐津割山椒向付五人(三千九百四十圓) ▲朝鮮唐津橫手水指(三千九百三十圓) ▲一蕙荷商會之圖(三千九百三十圓) ▲三條爲家卿紅葉歌短冊(三千八百九十三圓) ▲染付山水繪芋頭共蓋水指(三千八百三十九圓) ▲青磁繪花大平鉢(三千五百九十八圓) ▲中興名物千代能獨悟歌入消息(三千四百三十圓) ▲交趾黃鹿香合(三千四百九十圓) ▲時代桑山水蒔繪冠卓(三千四百十圓) ▲不昧公月繪譜(三千四百圓) ▲青磁中葉花入(三千三百九十圓) ▲細川三齋公和歌懷紙(三千三百五十圓) ▲時代香包蒔繪爐絲(三千二百九十八圓) ▲砂張輪耳四方火箸茶柄火箸、黃砂張六角花頭火箸(三千二百九十圓) ▲乾山色繪黃蜀葵向付十人(三千二百三十圓) ▲乾山繪變朝顔形向付五人(三千九百九十三圓) ▲北齋炎花鳥雞(三千九百九十圓) ▲松花堂寒山拾得雙幅(三千三百三十圓) ▲南蠻砂張鉄鉢建水(三千六十圓) ▲雪信

- 色繪壺花入(二萬九千九百九十圓) ▲大名物唐物柿茶入(二萬五百圓) ▲唐物勢子茶入(二萬五百圓) ▲無準禪師墨蹟(一萬九千四百圓) ▲染付高砂花入(一萬九千三百圓) ▲竹田詩畫卷(一萬八千三百九十圓) ▲爲恭勿來關足柄山雙幅(一萬八千圓) ▲西行時鳥八首歌切(一萬七千九百圓) ▲古伊賀萬里錦五雙船鉢古伊賀萬里錦唐子繪鉢(一萬七千七百圓) ▲光琳金地極彩色繪變兩面團扇六本(一萬七千五百圓) ▲秋暉櫻花雉子(一萬六千八百圓) ▲大雅堂瀟湘八景扇面帖(一萬六千三百圓) ▲竹田山陽漢江邂逅合作詩畫(一萬五千九百九十八圓) ▲後京極良經卿歌仙(一萬五千六百圓) ▲五十嵐道市作僧正遍正女郎花故事硯箱(一萬五千圓) ▲伯庵茶盤(一萬四千九百圓) ▲琦楚石墨蹟(一萬四千九百圓) ▲一鳳白狐(一萬三千九百九十三圓) ▲萬四千九百圓) ▲一鳳白狐(一萬三千九百九十三圓) ▲青磁袴腰小香爐(一萬三千九百圓) ▲抱一極彩色六歌仙扇六本(一萬三千九百圓) ▲爲恭春秋雙幅(一萬三千七百圓) ▲素絢月下打拈(一萬三千二百圓) ▲光起金地極彩色源氏繪六枚折中屏風一雙(一萬二千圓) ▲直入前後赤壁雙幅(一萬一千六百九十三圓) ▲唐物青貝内朱雙鶴香合(一萬一千四百三十九圓) ▲德川家光公嘯鳥(一萬八百圓) ▲抱一中乙御前左櫻花右紅葉三幅對(一萬三百圓) ▲時代梨子地富士山水松橋繪書冊(一萬百九十九圓) ▲傳山樂金地極彩色櫻花孔雀八枚折屏風一雙(一萬百圓)

五千圓以上

- ▲抱一雪松小禽瓶梅及幅(九千八百五十圓) ▲祖仙秋草鹿及幅(九千七百九十三圓) ▲堅手茶盤(九千四百十圓) ▲山雲金地極彩色雪中老松鸞二枚折屏風半及(八千三百九十三圓) ▲山陽十三號詠史六枚折屏風一及(九千三百九十圓) ▲清言源義家胤胤依兵三幅對(九千三百圓) ▲中靈昭女左杜若鳴右梅山雀三幅對(三千圓) ▲仁清長茶入(二千九百九十圓) ▲薩摩火入(二千九百八十一圓) ▲朝鮮唐津船花入(二千九百三十九圓) ▲宗全赤茶盤(二千九百九十九圓) ▲地黑秋草詩繪歌書簞筒五十四帖入(二千九百一十圓) ▲南蠻芋頭水指(二千八百九十五圓) ▲周銅爵香爐(二千八百九十三圓) ▲癡絕道冲禪師墨蹟(二千八百九十三圓) ▲歌磨美人三幅對(二千七百九十六圓) ▲二條爲家卿色紙(二千七百四十一圓) ▲遠州公尺八花入(二千七百圓) ▲染付水牛香合(二千六百九十三圓) ▲祥瑞鳥摘共蓋茶入(二千五百九十圓) ▲染付桔梗蓋置(二千五百三十九圓) ▲祥瑞詩入酒吞(二千五百圓) ▲吳州水玉火入一對二千五百圓) ▲安南絞手酒吞(二千五百圓) ▲空中手造芋頭水指(二千四百九十圓) ▲初代大桶丸茶入(二千四百九十圓) ▲光廣卿山崎歌短冊(二千四百五十圓) ▲唐軒共筒茶抄(二千四百圓) ▲寂蓮法師年暮歌切(二千三百九十八圓) ▲黃道周松石孤鶴(二千三百九十圓) ▲遠州公共筒茶約(二千三百八十圓) ▲堆米達磨香合(二千三百八十圓) ▲祥瑞彌字人物繪鬼摘共蓋振出(二千二百五十圓) ▲名物利久裏張茶約(二千二百一十圓) ▲牡丹花有柏三首和歌懷紙(二千二百圓) ▲青磁精樋口共蓋水注(二千五百五十圓) ▲元信營公像(二千三十圓) ▲時代地黑菊蒔繪阿古陀小手焙(二千圓) ▲染付爵酒吞(二千圓) ▲宗且水月繪贊(一千九百八十九圓) ▲不昧公好朝顔畫(一千九百八十九圓) ▲祥瑞丸紋扇面散蓋向付五人(一千九百七十三圓) ▲願流置筒花入(一千九百六十圓) ▲乾隆窯溫室式花入(一千九百三十圓) ▲釘影伊羅保茶盤(九百三十九圓) ▲時代藤組旅簞筒(一千九百二十圓) ▲櫻井基佐三首泳草(九百圓) ▲保全交趾寫牡丹獅子鉢(九百圓) ▲染付雲堂火入

- 對(九千三百圓) ▲古赤繪手唐犬金欄蓋香爐(九千圓) ▲半江旭日櫻花(八千九百六十圓) ▲唐津一葉香合(八千九百三十圓) ▲織田道八指月布袋繪贊(八千八百圓) ▲吳春中萬歲若松左右旭鶴恒雁三幅對(八千七百圓) ▲原隻手造赤繪茶盤(八千六百圓) ▲梨子地芦手書初音蒔繪長硯箱(八千四百十圓) ▲古九谷色繪四方七寶共蓋水指(八千三百九十三圓) ▲松翁柳蔭書屋(七千八百九十八圓) ▲破庵先禪師二行(七千八百九十三圓) ▲景文水上落花(七千五百九十八圓) ▲蘆雪紫木蓮蓋徽群鳥(七千三百九十八圓) ▲後京極良經卿歌仙(七千三百九十八圓) ▲青磁袴腰大香爐(七千三百九十三圓) ▲光琳下繪乾山額鉢(七千三百圓) ▲古伊賀分銅形耳付水差(七千圓) ▲古備前半月牛鉢(七千圓) ▲如心齋手造赤茶盤(六千九百九十圓) ▲和蘭陀色繪染付一及入茶盤(六千九百九十圓) ▲三作三鳥茶盤(六千九百九十圓) ▲不昧公手造赤茶盤(六千九百三十九圓) ▲黃瀬戸筒茶盤(六千九百十圓) ▲古備前平鉢(六千九百十圓) ▲唐物青貝蝶春日卓(六千八百九十八圓) ▲芳園芙蓉孔雀飛蝶(六千七百九十八圓) ▲頓阿法師三首和歌懷紙(六千七百圓) ▲染付糸卷香合(六千四百九十三圓) ▲祥瑞花鳥二段鉢鉢(六千五百十圓) ▲探幽中福緣壽左右竹鶴楓鹿三幅對(六千五百十圓) ▲八幡名物兆殿司中水月觀音左右漁舟飛泉三幅對(六千圓) ▲唐物青貝樓閣山水大卓(五千九百三十圓) ▲玉室一行(五千九百十圓) ▲東山名物寶鏝盆(五千九百十圓) ▲古天明聚釜(五千九百十圓) ▲周魚紋卮(五千九百圓) ▲空中灰器(五千八百八十圓) ▲遠州公山樓文(五千八百三十圓) ▲南蠻櫻籠四ッ乳水指(五千八百圓) ▲瀨戸玉川手芋ノ子茶入(五千七百十圓) ▲石州手造赤茶盤(五千六百八十圓) ▲青磁端

- 一對(千八百九十八圓) ▲乾山夕顏火入(千八百九十六圓) ▲堆米牡丹風扇形雙盆(千八百九十六圓) ▲珠德共筒茶約(千八百九十三圓) ▲宗達歌仙雙幅(千八百九十圓) ▲景文四季花鳥(千八百三十圓) ▲景文雪中松玻璃鳥(千八百九十九圓) ▲古谷三十六峰石(千七百九十圓) ▲家隆卿外底切(千七百九十圓) ▲岸胸中東方朔左豐彦白梅鹿右景文雙鶴三幅對(千七百八十圓) ▲夢窓國師墨蹟(千七百四十三圓) ▲竹心共筒茶約(千七百三十九圓) ▲高取墨茶入(千七百十圓) ▲道安文(千六百八十一圓) ▲光悅墨茶盤(千六百七十九圓) ▲南蠻切建水(千六百九十九圓) ▲宗且一行(千六百十圓) ▲來復心禪師墨蹟(千五百九十三圓) ▲乾山色繪繪變四方皿十人(千五百三十九圓) ▲光悅草花畫譜(千五百十圓) ▲青磁酒會壺(千四百九十圓) ▲古染付蘭繪波出茶碗十客(千四百九十圓) ▲瀨戸瀧浪手茶入(千四百九十九圓) ▲天明聚釜(千三百九十八圓) ▲時代地黑竹蒔繪阿古陀手焙(千三百九十圓) ▲染付銀杏香合(千三百九十九圓) ▲瓢炭斗(千二百九十圓) ▲德川家康秀忠家光三筆色紙三幅對(千二百三十九圓) ▲青磁鉢ノ子鉢(千九百九十圓) ▲墨斷紋團扇(千圓) ▲金馬輪高臺炭斗(千圓) ▲紫泥無地俱輪玉茶鉢(千九百八十八圓) ▲鼓鎖和尚雪和歌(千九百八十八圓) ▲唐所肩衝茶入(千九百圓) ▲小貫入茶盤(千九百九十圓) ▲希顏禪師墨蹟(千六十三圓) ▲宗全籠花入(千五十圓) ▲與次郎鉢屋釜(千三十九圓) ▲如心齋共筒三本入茶約(千圓)

- 五百圓以上
- ▲古道也透木釜(九百九十一圓) ▲蘆屋肩衝釜(九百九十圓) ▲石州公共筒茶約(九百三十九圓) ▲古錫菱花式茶壺(八百九十八圓) ▲時代桐獅子足彫火鉢(八百九十圓) 以下省略

保善院の出土の嘉吉鐘

前掲の嘉吉鐘

三村清三郎

東京ではまだ雷が堅いの、湯河原の花はもう満開だった、私は尾根の櫻を仰ぎ乍ら、お住持の哲宗師のお話に耳を傾けてゐた、庭で會田富康君が夢中になつて、庭に轉がしてある鐘を拓つてゐる。私の甥の保義と熊澤重一君とが手傳ふ、本堂の修覆に來てゐる大勢の人がそれを圍んで、會田君の手許に白く現はれる文字を珍らしげに眺めてゐる。

永逗留の浴客を慰める爲めに、此所の山へ遊園地を造らうといふ計畫は、可なり前からあつたのだが、其車道が或人の別荘にかゝるので頓挫してゐた、そこで設計を更へて保善院の地所を提供して呉れまいかといふ事になつた、町の繁榮に資するならばと、哲宗師は世話方と相談して、一日半ですら〜と話が出來た、車道がつけば、從來右折左折して三門へ通じた徑を、眞直に車道へ通じた方がよいと考へてゐると、一昨年秋の大嵐で其三門が倒れた、門を建替るならば、いつそ少し門をふりかけて見たいといふ事になつた。車道からは高一間許りの崖になつてゐる畠地を堀鑿して路を開く、丁字になる角を方形に開かけたが、圓く取つたら尙便利だらうといふので、圓く切開く事にした。因縁は順々に熟してきてゐる。丁度去年昭和八年五

月二十六日朝の六時、哲宗師が朝の勤行をしてゐると、土工が飛んで來て、鐘が出たといふ。初め圓い穴が見えたので、化生の柄所かと懼れをなしたが、之れは鐘の口であつた。會田君の測定に據ると、總丈三尺二寸七分、口徑一尺七寸六分、龍頭の高さ五寸七分、幅六寸二分で、撞座の無い縦帯に向いてゐる。笠形の下の圍が四尺と六分、乳は楕形で一行四個四列宛計六十四個、撞座は前後二ツ、其徑は二寸八分、駒の爪の高サ一寸、厚サは一寸九分、出張り七分ださうである、さうすると鐘の厚サが一分となる、鑄口は龍頭に並行してあつた、池の間の一に、

豆州山木郷寶壽寺
住持比丘壽敬
嘉吉三年癸十二月三日
大工阿邊山城守
守信

と陰刻してある。熊澤君の調査された所では、寶壽寺は今廢寺になつてゐる、相摸風土記に出てゐる保善院の鐘は徳川期のものが記載されてゐるといふことであつた、此鐘は今は無。金石私志伊豆伊濱の善照寺の寛正五年の鐘に、山林大工安部山城守重藤とある、(但し集古十種大工名を缺く)昔の人は音便で、異つた文字を平氣で流用するから、阿邊と安部との關係も、年代は近し、又同じ伊豆でもあるから、一考したい、少し古いが鎌倉長谷の嘉曆の御聖體も安部とあつたと思ふ。

天保の末に此の保善院が伊豆山權現の別當と公事をして、負けたので、色んなものを伊豆山へ持つて行かれた、其の時取られては大變だといふので、鐘や何かを上總の方へ隠さうとして、船で運ぶ途中、海が荒れたので、眞鶴の岬で沈めてしまつたといふ傳へがある、其傳へを信じて、其鐘は風土記所載の鐘の事か、將た又此鐘の事で、さう傳へさせて置いて畠へ埋めたのか。寶壽寺とこの開山禪師とは所縁があるので、持つて來たともいふが、寶壽寺の廢した時も知りたいし、廢した以前に鐘が移つたかどうか、熊澤君が今切りと其調査をして居られる。維新前に國防の爲め寺々の鐘を取外づして大砲を鑄るといふ事があつた、其時に隠したのであらうとも言つてゐる。昭和七年五月二十五日に、やはり湯河原町宮下宇山口から數千枚の孔方錢が発掘され、標本に文字の異つた一枚宛箱へ納れて持つて來てあつた、それは瓶などに入れてもなく、ばらばらで出土したといふ、開元もあれば元祐大觀もあり、永樂もあり、寛永もあり、大世世高もあつた。永樂後の支那錢は無く、文久錢もあつたが、それは外のが混入したらしい、其古錢の銹色が此鐘の鑄色と殆ど同じであるのも面白い、鐘の埋め方も極淺かつたらし。

保善院の場所は、大まかに湯河原といふが、實を溪を隔て、此所は熱海町宇泉といふ地である。大抵の國境は峰を界とする。水を流して流れる方を其國としてある、こゝも素は相州であつたのを、或惻巧ものが其土地を私有すべく、明治の初に、時の顯官に縁つて、伊豆分にして、扱て自分のものにしてやうとして出来なかつたといふ噂もある。

保善院には此外に虚空藏菩薩の御聖體、北條氏や豊公の朱印のある文書などもあつた、文書は史料編纂所で寫して行かれたといふ、又弘法大師作といふ地藏尊がある筈だとして木像と銅像とを示された、木像はさしたるものとも覺えぬが、銅像は五寸程の半跏像で、厨子や臺座は新しいが、いゝお作に拜せられた、會田君が試に背をかへすと、度々修繕を加へたらしく、漆が使つてある、其漆の間々から彷彿として文字が見える、私にはそれが直感で貞和と讀める、哲宗師に願つて、會田君に漆を剝して貰つて見ると果して 貞和五卯月十九日 と刻してあつた。前の竹藪で小鳥が嬉しげに啼いてゐる、雨催ひの空には雲を透してほつかりと日のありどが見える。昭和九年甲戌四月五日稿。

○長正刊書物店理(四月) 左の如き記述がある
心出物休の保信多きくぬめとあるが、まづ「却り
の既耳なしれよのび、ふら、後んてんてん
情しい氣ある中、ふら、何んのこと
てんてん、おん、おん、今に及んか
ぬめと解を得れよのびある 四月廿五日

『杯洗の雫』雜感

混沌庵

竹山人の歌謡隨筆は從來野暮の門外漢ながら愛讀して居る一人である。今回『杯洗の雫』が出版され拜見すると流石に少雨莊主人の装幀丈けに如何にも江戸好みのもので眺めて居ても氣持が好い。装幀には素人の自分は批評する資格はないので差控え内容に付いて感想を一寸述べて見たい。
春とは云へ北越の新潟では未だ時折雪が降る。自分は雪の降る音聞きながら炬燵

は歌謡方面に限られたが、此書は身邊雜記の如きものや思想問題に迄及び硬軟とりどりで讀むに面白く、又山人の面目躍如として居り、山人を知る人々には感慨深いものであらう。

自分は通讀して山人の歌謡研究に對する倦まざる精進と自己の誤謬疑問に就ては他人の意見を聞くに吝さかたなく、或者の如く自説を固守せず訂正される寛容の態度には頭を下げた感服する者である。
夫れに慣れて些か心付いた事を書いて見たいと思ふ。歌謡には門外漢の山人の所謂積讀書生の愚説も他山の石とならば幸甚である。

(49)
先づ同書一〇四頁の「傳説と共に傳はる唄」中の「越後鯨波の王家の椿、枝は白銀葉は黄金」の唄であるが、此れは玉屋の椿なる傳説が残つて居るもので、新潟毎日新聞記者中野城水氏著『傳説の越後と佐渡』

屋の椿二〇三頁及び、石原亨氏著『越佐傳説夢を買ふ話』(大正十三年、長岡市加藤書房發行)『玉屋の椿』四三頁に大同小異の話が記されてあるが、概説すると越後刈羽郡鯨波村に、昔玉屋と云ふ代々の海産商があり、徳兵衛と云ふ者の代には勤勉のお蔭で一代の内に長者と稱はれる身代となつたが、何不足ない徳兵衛にも一つの心配があつた。夫れは金銀の置場所であつた。徳兵衛は散々惱み抜いた上、夫を屋敷の裏の竹藪中の一本の椿の根元に人知れず埋めた。夫れでも尙不安でならず遂に今で云へば神經衰弱にかかり、治療の爲め伴をつれて松之山温泉へ湯治に行つた處、半月程経つての事、湯壺に浸つて居ると、「越後鯨波玉屋の椿、枝は白銀葉は黄金」と外で唄つて居る者があるので、驚ろいて直ちに帰宅し椿の處へ行つて見ると、唄通り枝は白銀に葉は黄金に燦然として輝いて居るので

の全快せず死んで了つたが、臨終に及んで妻に初めて委細を話したので、妻が後で竹藪に行つて見たが、椿は只の椿で其根元を掘つても何もなかつた。夫より玉屋は次第に衰へて屋敷の跡方もなくなつて了つたと云ふのである。
序でに『傳説の越後と佐渡』中所載の傳説唄を紹介する。
前篇一九頁、蚯蚓の糞、佐渡郡小布施村の項中、「金があるとして高慢ぶるな、佐渡ぢや蚯蚓が糞をひる」是れは同村に砂金が出た時代の唄である。
同五八頁、東林房の櫻、佐渡郡西方村の項中「東林房の櫻、世帯だをしの糸さくら」所謂老樹傳説である。
同二二三頁、貉の團三郎、佐渡郡澤根町の項中「お伊勢七度熊野へ三度、山の神さんへ月詣り」團三郎と云ふ貉が所々へ坊主に化けて旅行した傳説唄である。

同二四二頁、玄蕃の森、三島郡來迎寺村の項中「浦村玄蕃の森に鳥止まらぬこそ不思議」名家没落に絡まる唄である。

同二七〇頁、姫名草、佐渡郡高千村の項中「片邊鹿の浦中の川の水飲むな毒が流れる日に三度」片邊、鹿の浦共に漁村の名、中の川は兩村間を流れる小川で、流着美人に絡まる傳説唄である。尙後篇三四頁に安壽、對王傳説に絡まるものとしてある。

同二〇一頁、不出ヶ澤、南魚沼郡三俣村の項中「あしや三國淺貝育ち、米の生る木をまだ知らぬ」越後より上州へ去る三國峠の山腹にある寒村淺貝村の唄である。此れに似た唄は諸國にある様に記憶する。例へば「あや備前の岡山育ち、米の生る木はまだ知らぬ」。

後篇七六頁、潮音坊—佐渡郡吉井村の項中「浪の音聞くがいやさ此山籠り、今は色かへ松の風」此の唄は吉井村出身の相川に弘誓寺を創立した潮音坊の作と傳へられ

て居る。

同二二七頁、鮑の船、佐渡郡加茂村の項中「殿は山(金北山)参り、出たら羽黒で逢はうもの、笠を買ふなら三蓋笠買うてくれ日和小笠に雨ふり笠に、羽黒詣りの伊達笠に」佐渡の男は金北山に女は羽黒山に一度は参詣せねばならぬ慣しの由である。

筆の序に「新潟古老雜話」鏡淵九六郎編昭和八年新潟古會發行中の維新頃新潟に流した俗語を抜書する。

同書八〇頁、官軍の宿と唄中「會津米澤腰抜け武士よどこへ逃げたか身はないか」「會津殿様油屋の締木、うしろ前から攻められる」。

同書一七頁、沼垂盆唄中「駱駝見やうか米一升買はうか、見ねで米買へば氣はらくだ」見ねでは見ないで、方言である。年代不明なるも駱駝の見世物が来りし時見料三錢にて米一升の價と同じであつたと。「わしとお前は御歳の米よいつか世に出

てままとなる」「どこのどん畜生が鋤運か

きそめた、可愛兒やさを泥だらけ」「上に花持ち横町で開く、散つて流るる他門川」「盆と盆花御精靈さまよ、せめて七日も立て立ちやれ」「新潟新地の道樂稻荷俺も二度騙された」「道樂稻荷と云ふのは今も存在し近所に遊廓があつたのでかく唄はれたのであらう」「揃ふた揃ふたよ小若い衆が揃ふた、稻の出穂より能くそろた」「沼垂名所のお蔵の松は年が経つほどふりが良

い」「沼垂には新發田藩藩口家の米蔵があつた」尙此近在の地名を唄つたのに「龜田あんこに打乗つて、沼垂川助眺むれば、六體地蔵の導きで、石山二つを早過ぎる幽に見ゆるが鳥屋野湯、紫竹や燈を馬で越す(馬越村)花の御蔵を横に見て、浦原六郎へ参詣して、大橋過れば鹽番所、八千八川の大港、首尾よく越えたが運上所」(點を附した所は附近の地名で、あんことはあんこ舟と稱されて居る小さい長舟である。浦

原六郎とは沼垂の浦原にある有名な神社で本名は五社明神で久々廻知命、迦具土命、金山彦命、水波乃賣命、值山姫命の五柱を祀るのである、畠山六郎重宗が浪人となつて此神社に仕へたより六郎様と通稱されて居る。鹽番所とは粟の木川の葦地にあつた番所で役人は閑散で鹽ばかり眺めて居ると云ふのでかく名付けられた。八千八川は信濃川は港口に来る迄に八千八の支流が集つたものであると稱されて居る。「沼垂ヤア眞善寺の裏路次見やれ、獅子に牡丹に孔雀の鳥よ、近江八景の鏡山」(眞善寺の庭の眺めの好いのを唄つたものである)。「おらも行きたや神末の二階、行けば一分の金がある」「ころんだころんだ神末亭の前でお松さ思ひ出しや起きられぬ」(沼垂の明治初年頃流行の旗亭神末亭を唄つたものである)。「新潟女郎衆は鋪の性よ、けさも出船を二艘とめた」「一つ日和山ひと花さかせ、二つ俄にちよろろをおろし、三つ港に

入船なざる、四つ四つ足の鋪をおろし、五ついつ迄も船とめおいて、六つ陸しくかた船よんで、七つなじみの子供衆ももて、八つやたらに太鼓や三味で、九つ小宿の其にぎやかさ、十に問屋衆は御繁昌に暮らす」(ジョンカラ節でもよろろとは小舟で、子供衆とは女郎を指して新潟ではかく呼ぶのである)。

次に本書では「本間様には及びもないがせめてなりたや大名に」とあるが、此は殿様の方が正しいであらう。酒田の本間家の小作米は藩主酒井侯の石高の倍以上であり、酒井侯が出府して將軍に拜謁の折、その領内に何か異つた事はないかと聞かれ、酒井侯は手前の領内の本間と申す百姓は手前の石高以上の作米が御座ります。天下に之より異つた事は御座りませうと答へて將軍を驚かしたと傳へられて居る位であるが、本間家は代々質素儉約を旨とし近代迄主人と雖も絹布を着けず而して下に對

して厚かつたもので決して豪奢な生活をしたものでない。此唄は本間家の身代の大きなを唄つたもので「田沼様には及びもないが、せめてなりたや公方様に」とは唄の意味を異にするものである。後の唄で思出す事は越後長岡藩にも此れに類似の唄が幕末に流行した事である。今泉鐔次郎著「河井繼之助傳」昭和六年目黒書店發行)第五章藩政の改革、一五四頁「御代官には及びもないがせめてなりたや殿様に」と唄はれた程繼之助が家老となつて藩政改革する前は藩の財政は紊亂し赤字續きなのに反し、代官郡奉行等は公然と賄賂をとり、俗に「三年が程も郡奉行を勤むれば植木に小判の花が咲く」と稱せられし由である。

又本書一〇七頁「参議と繼之助を唱ふ」の内「河井々々と今朝まで思ひ、今は愛想も繼之助」の唄は「繼之助傳」同章一七三頁によると繼之助は書生時代より一時は盛んに遊んだものであつたが、家老となり藩

政の改革に従事するや奢侈、蓄妾、賭博等を禁止し且つ遊廓まで廢止し娼妓を解放せしめたので此の落首が出来た由である。

又「こちや浪人あすこちや戦さ、主の浮氣も無理からぬ」の唄は同書同章一七四頁によれば、繼之助の夫人壽賀子が或時下婢が繼之助の放埒を告口せし時無言で覗引寄せ書いて示したもので夫人も仲々分けのわかつた人であつたらしい。蓋し同書には「無理がない」としてある。

尙山人の舊著趣味の小唄「名士の作れる俚謠」中繼之助の作とし「四海波でも切れる時や切れる口約束でも二世三世」が記載され、又「明治後半期の俚謠」中に「九尺二間に過ぎたるものは紅の付いたる火吹竹」の唄に就いて考證されてあるが「繼之助傳」同章一七五頁併屋女將本間むつ女の談及第十一章逸事六六五頁によると繼之助は酒に酔ふと必ず右二つの唄を歌つた由で本書でも「口約束でも」が「三味線歌で」

となつて居る。而して繼之助の作とは記してない所を見ると江戸留學遊蕩時代に覺えて來たものであらう。而して九尺二間の唄も同様で山人の考への如く幕末に江戸で流行した俚謠に過ぎないものであらう。以上思ひ付くまま取り止めもない事を書付けたが、若し山人の叱責に逢はず参考の一助とならば満足である。妄言多謝。(昭
和九年四月三日)

木村毅氏の

『西郷南洲』

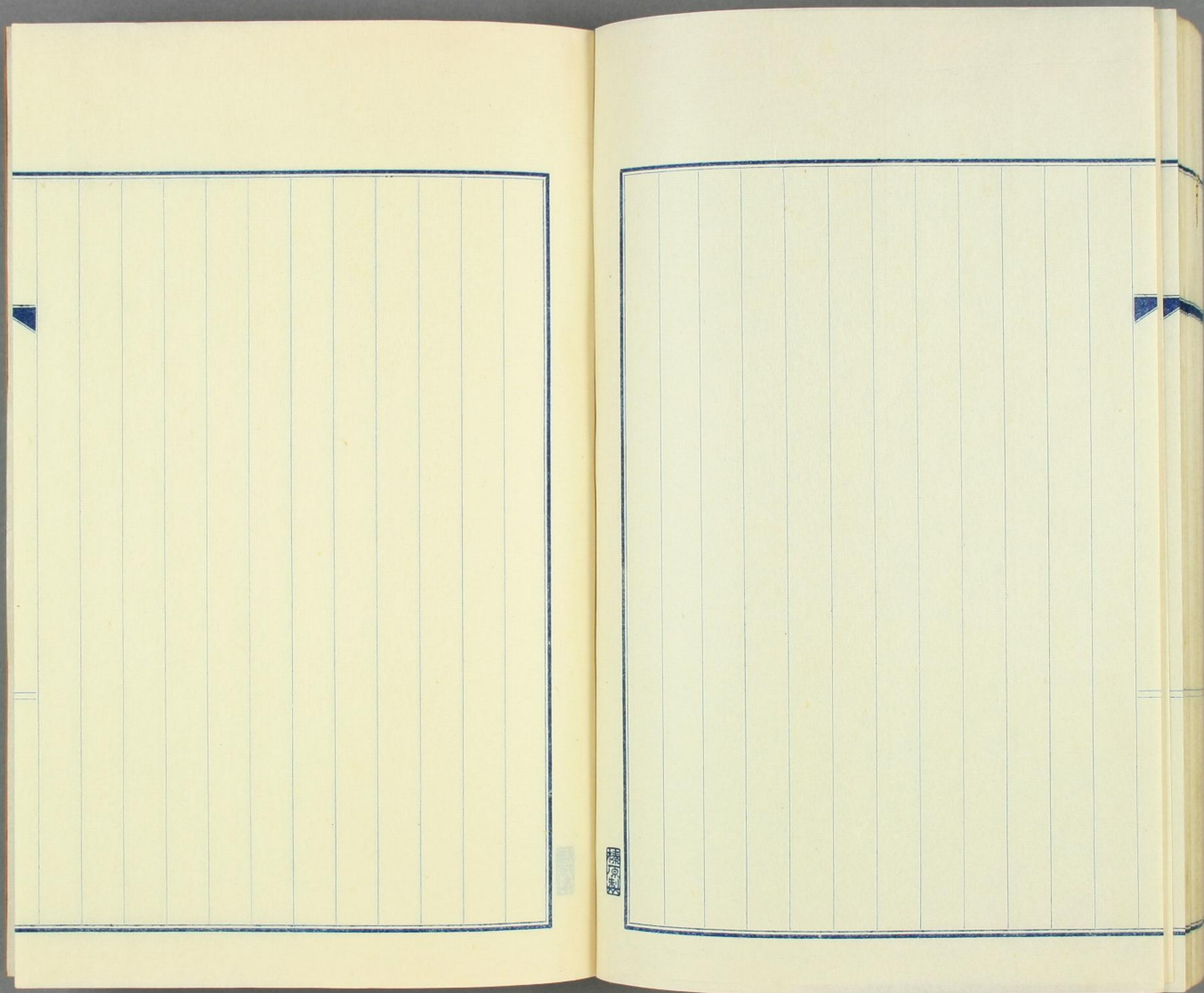
須賀 調 七

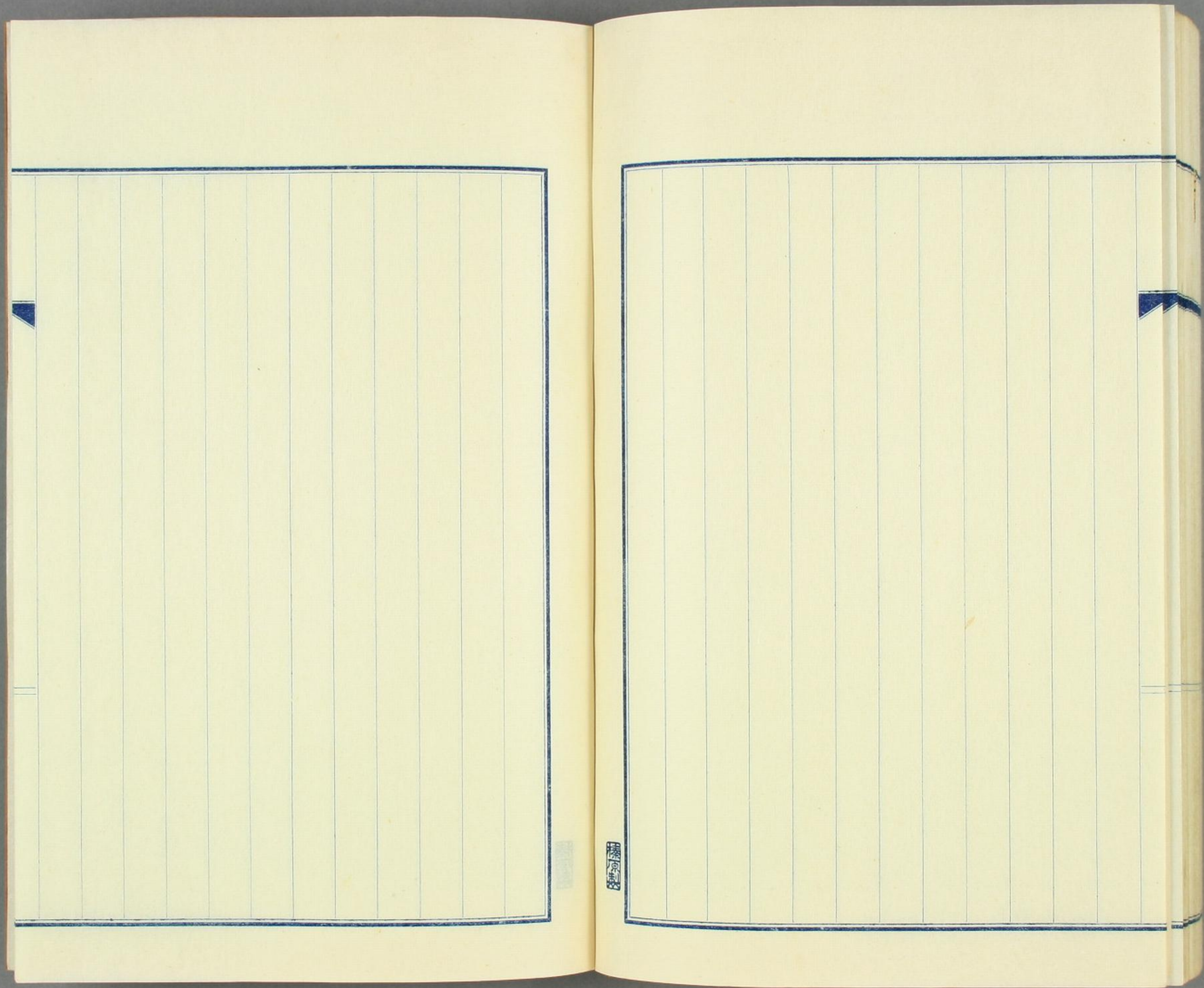
「西郷に關した著書は、聖書とシエータ
スニアに次ぐ羅澤山ある。」と、木村氏は其

序文に云つてゐる。成程さうかも知れない。氏は尙續けていふ、「だが多くは、習俗的な見解を累積するだけで、その重壓に、秋風、屍を吹くの英雄を窒息させてゐる。私の描いた西郷が、少しでもその窒息から彼を甦らせてをれば幸ひだ。」と。恐らくそこが、氏の狙ひ所であらう。では果して、窒息せる西郷は氏の筆力によつて甦へることが出来たか。

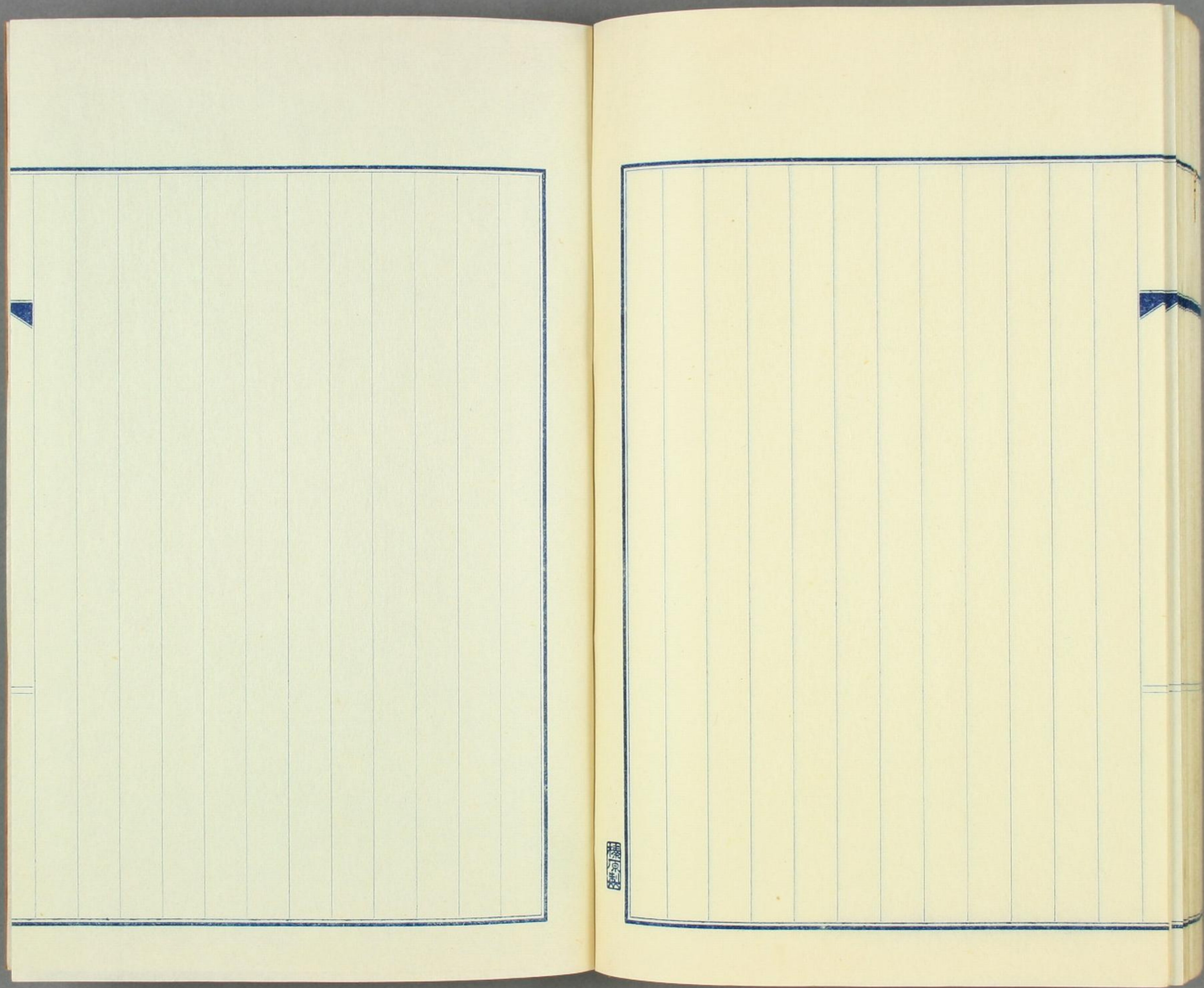
傳記小説は、氏の得意中の得意である。それ位のことゝが爲し得ないで何としよう。偶像西郷は今や本書に於て、見事に生命を吹込まれてゐるのである。

凡そ人間の生活には、如何なる偉人であらうとも、例外なしに表裏の二面がある。而して表面の方は、歴史や傳記が充分に傳へてくれるが、裏面、つまり複雑な感情や矛盾せる私的言動の如きは、小説によるより他には傳へようがないのである。而も眞の生活は寧ろ此方にありと云つてもよい。





河漢



蘭河



灰黑石獅子



粉彩磁轉花瓶



山西省 大源府唐時代佛像

